
竜と虎と月下美人

月下の梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜と虎と月下美人

【Nコード】

N7183I

【作者名】

月下の梟

【あらすじ】

三国時代。漢王朝は廃れ、その権威を失い群雄割拠の時代を迎える。その時代の流れの中で記憶を失った少女は陰謀に巻き込まれながらも必死に時代を生きた。

そして、少女はその片腕として生きた兵士と西涼の豪族の嫡男とを繋ぐ事となる。

記憶を失った少女

「いいわね。今から何が起きてもここから出てきては駄目よ。」

「お母様は？」

「私は大丈夫よ。何があってもあなただけは守ってあげますからね。」

「この子だけは死なせるわけにはいけない――」

女性は少女の肩に手を置き、言い聞かせると立ち上がった。

「嫌だよ……ここで一緒にいようよ――」

少女は女性の裾を離そうとはしなかった。

「いい子だからここでおとなしくしているのよ。」

「おばちゃん……おばちゃんも言ってしまうの……一人は寂しいよ――」

「……うん、わかった」

少女はそう答えると素直に手を離れた。そして、銀髪の女性は少女を納屋の地下室に押し込むとその場を離れた。

――もし、この世に神が存在しているのなら責めてこの子だけでもお助けください……――

神はその願いを受け入れた。一人の少女の命は助かった。が、その代償としてその場にいたものは全て命を落とすこととなった。

翌朝、そこに洛陽から派遣された王允は凄惨な惨状の中で一人佇む少女を保護した。少女の胸には西域の物と思われる首飾りが哀しい光を携えていた。少女は全てを失っていた。家族、そして記憶を……その首にかけられた首飾り以外の全てを失っていた。その後、少女は王允に引き取られ、養女として育てられることとなった。

この事件から五年が経ち、昨年は袁紹と曹操が中心となり諸侯が連合軍を編成し、董卓軍を撃ち破った。董卓は洛陽の都を焼き払い、長安へと強引に遷都した。長きに渡って積み重ねてきた歴史ある都

“洛陽”は一晩にして炎に飲み込まれ、董卓軍の兵達による漢王墓は発かれ、民衆の財産は全て没収され阿鼻叫喚地獄へとその姿を代えた。

戦に破れたものの董卓の力は強大で、未だに世は董卓が権勢を振るい、世は一層混沌としていた。董卓は呂布を配下にくわえ、傍若無人の振る舞いを続けていた。黄巾の乱、十常時、董卓の悪政。続く混乱に皇帝三台にわたって漢に仕えてきた忠臣王允は頭を抱える毎日であった。

王允は庭で妹の春香と遊んでいる貂蝉を見かけた。あの事件で全ての記憶を失った少女に貂蝉と名付け、我が子のように可愛がってきた。実子である春香も彼女に懐いていた。貂蝉の容姿はこの世の者とは思えぬほどの美しさで街中ではすれ違えば誰もが振り返り、目を惹きつけられてしまう魅力を持っていた。これまでも数多くの若者達が求婚してきていた。貂蝉は私に気付くと妹の春香と共にこちらにやってきた。

貂蝉は夜になると必ずと言っていいほど西側の窓辺に行つては物思いに耽っていた。ある満月の日、窓辺で物思いに耽る貂蝉を見た時、頭の中にふと一つの妙案が浮かんた。それは被害が少なく、労せずに呂布と董卓を決別させることが出来るものだった。しかし、それは残酷で人の道を外れる物だったのだ。とはいえ、権力の全てを手に入れようとするには呂布と董卓は邪魔な存在であったのだ。

ある日、思いつめた顔をした父、王允を見つけた私は迷わずに話しかけた。

「どうかなさつたのですか？お父様。」

私はこのとき父の考えていたことが何となく、いや、正確にわかっていたように思う。何よりもこの国を愛している父であったから…

「貂蝉か…どうしたのだ。こんなに夜遅くに…」

「お父様。何かお悩みのようですね。」

そう言つと父は表情を固くし、

「いや、お前が気に病むようなことでは無いよ。ほら、早く休みなさい。」

「…お父様の悩みの種を一挙にこの私に取り去つて見せましようか？」

父は不思議そうな顔をして、私を見つめた。それに私は笑みを浮かべ、

「私は董太子のもとに嫁ぎます。そして、呂將軍との仲を引き裂いて見せましよう。」

貂蝉が王允に告げた策はまさに王允が考えていたものだった。

「しかし、貂蝉。それは…」

貂蝉は王允の言葉を遮り、

「お父様。私は五年前、拾つて頂いた恩を返したいのです。お父様が国の為に戦つと申されるなら、私はお父様の為に戦います。戦わせて…下さいませんか？」

決意に満ちた貂蝉の瞳を見て、思わず貂蝉を抱き寄せた。

「すまない。本当にすまない。お前にこんな過酷なことをさせるなんて…この父を許してくれ…」

王允は貂蝉を抱きしめ、何度も何度も謝罪した…貂蝉が部屋を去つた後、王允は笑わずにはいられなかった。迷いはなくなり心置きなく貂蝉を利用できるということ…これから手に入る絶大な権力のことを考えるとその笑いは止まらなかった。

そして、その策を実行に移す日がやってきた。

王允は呂布の邸宅に向かいぜひとも一献交わしたいと呂布を自宅に誘つた。呂布は簡単に誘いに乗つてき、その日のうちに何うと返してきた。

その夜、王允の邸宅ではささやかな宴が開かれた。夜も更けてい

き、宴も終わりに近づいてきた。

「そう言えば忘れていたことがございました。」

そう言つて王允は手元の鈴を鳴らした。

「忘れていたと言つと…?」

呂布が尋ねると

「いえ、このような酒宴で男二人で飲むというのも無粋というもの…何か華をと思ひまして…」

そう王允が返すと明かりが全て落とされた。

庭の池の上にある釣殿だけは月明かりで照らされ、そこでは一人の美しい女性が舞を舞っていた。呂布は思わず手に持っていた杯を落とし、

「あれは天女か…」
と、漏らしていた。

「どうやらお気に召されたようですね。」

王允の言葉に呂布は我に返った。

「あ、ああ。して、彼女は一体…」

「我が娘でございます。」

俺は驚いた。この王允に娘がいたとは。しかもこれほどの美女…いや、絶世の美女と言つても過言ではなく、宮殿でもこれほどの女は見たことがなかった。これほどの容貌である。求婚者は絶えなかったに違いない。

「して、王允殿はどうして彼女をこの宴に？」

この言葉を聞いて王允はわずかに口元を吊り上げた。

「実は彼女は今年で十三になるのです。お恥ずかしい話ですがこの老いばれは我が子可愛さ故にまだこの家から出したくなかったのです。しかし、私ももうこの年。この先、私に何かあれば彼女は独りになります。それで將軍ならと思い、今宵に参上させたのですが、お気に召さなかったでしょうか？」

この言葉に呂布は

「そんな事ある訳ない。是非この俺に出来ないか？」

王允は大袈裟に

「それはよかった。では早速にでも嫁がせる準備をさせましょう。

七日後に將軍の邸宅にお届け致します故に…」

それを聞いて、呂布は満足そうに

「ウム、わかった。待っておくぞ。」

と答えた。

呂布が屋敷から出て行くと不敵な笑い声を王允はあげた。その笑い声はこれから手に転がり込んでくる権力のことを考えると笑いが止まらなかった。

呂布が宴に來た日から三日後、董卓が王允の邸宅を訪ねてきた。

「これは、これは董卓様。今日は何用でございますか？」

「いや、何。近くを通りかかったので寄ってみたのじゃ。」

そう言いながら董卓はきよきよと周りを見回している。董卓の側近の者達に吹き込んだことは十分に効果が出ているようだ。その様子からは貂蟬が目当てだということは一目瞭然であった。

「どうじゃ、今から一献交わさぬか？」

この申し出は王允にとって願ってもいなかった。狙った獲物が向こうから転がり込んできたのだから。

「このような時間からでございますか？」

王允は焦らすように返した。

「なんじゃ、不都合でもあるというのか？」

思い通りにならなければ暴れる子供のような男である。焦らされるのは苦手であろうと私は踏んでいた。それも見事に当たっていた。見る見るうちに不機嫌になるのが手に取るようにわかった。

「いえ、滅相もございません。董卓様自らがこの屋敷に来て一献交わそうなどと申されたのでしたら家名にも箔が付きましよう。」
それを聞いた董卓の表情は見る見るうちに明るくなっていった。

「では、早速宴の準備をさせましよう。少しお待ちいただけますか？」
「よからう。」

私は早速、宴の準備に取り掛かせた。

今回の宴は酣となり、互いの気分も高揚していた。呂布の時と同様に貂蝉を呼び、舞を見せた。董卓は思ったとおりの行動に出てきた。

「あの娘、儂にくれんか？」

願うような言葉であるが態度そのものは威圧的なものだった。反対すればまさに命は無いと言っている様なものだった。

「ええ、構いません。彼女は我が子可愛さゆえに私が出し渋って思ったのですが董卓太子ほどのお方でしたら…」

その言葉に董卓は

「そうか、そうか。ガハハハ。では今すぐにでも連れて帰ろう。」

そういつて董卓は貂蝉の手を引き、部屋を出て行った。貂蝉は一度だけ振り向き、私に向かって目配せをした。それは

『ご安心ください。必ずや成功させてご覧にいきます。』
と、言っているようだった。

董卓に連れられ、宮殿に入った貂蝉は宮殿の中でもっとも大きな部屋を与えられた。しかし、貂蝉はそれを断り、屋敷の西側にある離れの小さな一室をもらった。この日から董卓の宮殿での生活が始まったのだった。

貂蝉が董卓の宮殿に連れて行かれた翌日の夕方、王允の屋敷に一人の男が乗り込んできた。呂布である。

「王允！貴様！あれはどう言うことだ！何故、貂蝉を董卓にやっ
てしまったのだ！」

激昂した呂布に王允は

「將軍？実はそのことなのですが…」

王允は涙ながらに話をした。

「先日、董卓が自宅において少しばかりの持て成しをし
たのです。その時に召使の者が調理場に忘れたお酒を貂蝉が持つて
きたのです。それを見た董卓が大変気に入られてそのまま連れて
行かれてしまったのです。」

今は董卓の世。私如きが反論しようものならこの首がなくなっ
てしましましょう。このように言ってしまうえば命惜しさに娘を手放
したと思われるかもしれないでしょうが、我が子を喜んで手放す親
がこの世におりましようか。いいえ、おるはずがございません。私
とて貂蝉を手放したくはないのです。ですが、逆らえば貂蝉の命す
ら危ないと思い、涙を吞んで董卓の言うままになったのです。し
かも、それを察したのか貂蝉も悲しそうな顔をしつつも、別れ際に
なんと言ったと思いますか。“大丈夫”といったのです。一番つら
いのは貂蝉自身だというのに。この老いぼれのことを庇うようにし
て連れて行かれたのです。」

將軍には申し訳ないと思っております。もし、気がすまないと申
されるならこの老いぼれの首でも何でも持つて行きなされ。最早、
貂蝉に会えぬ一日などつらくて、つらくて生きる意味もございませ
ん。さあ、お気のすむままになさい。」

王允はその場に座り込み、首を斬るように促した。呂布が幾ら万夫
不当の豪傑と雖も、このように悲しむ者を斬れるわけもなく、

「王允殿、すまなかった。よし、この俺が何とかして見せよう。」
そう言つて呂布は屋敷を去つていった。

呂布は屋敷に戻るなり、貂蝉のもとに駆けつけた。

「貂…」

貂蟬に呂布は話しかけようとしたがそれを一瞬だったが躊躇った。夜空を見る貂蟬の表情はあまりにも哀しみに満ちていたのだ。しかし、呂布はそれを董卓に無理やり連れてこられたからあのように憂いているのだと強引に自分を納得させ、話しかけた。

「貂蟬…」

その声に貂蟬は振り返った。が、その表情には先程の憂いなどは微塵も感じさせない物だった。

背後に気配を感じたが私は悪意が無い物とわかり気にしなかった。すると、

「貂蟬…」

その声は聞き覚えのある者であった。振り返った視界の先にいたのは「奉先様…このような夜更けにどうかありませんか？」

視界の先にいた呂布にそのように尋ねると呂布は

「そのように憂いているのはやはり…」

そう言いかける呂布を遮って、

「奉先様には申し訳ないと思っています。ですが、これも天命と思いい、董太子についていこうと思っています。」

そう言った私の肩を呂布は掴み、

「貂蟬、この俺はいつでもお前の味方だ。何かあれば必ず言うてくるのだぞ。」

そう言って、呂布は去っていった。

呂布が去ったのを確認すると私は再び夜空を眺め始めた。貂蟬は何時も思っていた。この夜空に何があるのかと、そして、それが私の失くした記憶に関係のあるのではないか。

貂蟬と言う名は本当の名前ではない。本当の私の名は何なのか。私が求める答えはこの夜空にあるのではないかと…

鬼神の末路

貂蝉が董卓の宮殿に上がって一年がすぎた。董卓の暴挙は益々酷くなる一方であつた。宮殿に來た当初は貂蝉のところに来るのを控えていた呂布ではあつたが最近ではほぼ毎日来るようになっていた。ある日、董卓はある村の住民全てを年貢が足りていないと言つて呼び出した。しかし、その村は収めるものは全て収めており、限界ぎりぎりの生活を送つていたのだ。そのことを村長は伝えるが董卓は「口答えは許さん」

と村長と共に連れてこられた村長の孫を愛刀の阿修羅で斬捨てた。

「よいか。この儂に逆らうとどうなるかこれでよくわかつたじやろう？ なんじゃ？ 哀しいと…なるほど…ならば、その悲しみをこの儂が消し去つてやろう…」

そう言つて、一気に阿修羅を村長の体に突き刺した。

「覚えておくがいい。民などゴミも同然…代えなどいくらでもあるのだ。死にたくなければこの董卓の命を勅命と思い遂行するのじや。」

董卓は高笑いを挙げながら泣き喚く民達を見下したのだつた。

貂蝉はその状況を上から見ていた。村長の子どもが斬られたと同時に部屋に走りこんだ。そして、自分はまた董卓の暴挙を止めることが出来なかつた。あの親子を救うことが出来なかつたと自分を責めていた。そんな時、そこへ呂布がやつてきた。

「貂蝉、どうかしたのか？」

「奉先様…もう私はこれ以上董卓様についていくことはできません。私は…私はこれからどうすればいいのでしょうか？」

その貂蝉の表情を見て、呂布は

「貂蝉、お前が奴を討てというなら俺は喜んで奴を討つ。」

と、言い放ち、離反の決意をあらわにした。

その数日後、董卓は少帝に続き献帝までも廃立させ、自らが皇帝よりも権力ある者と言うことを天下に見せつけ、自らが皇帝となる事を民衆の前で知らしめるために宮殿に向かっていた。その最中、車輪が外れてひっくり返り、董卓は転げ落ちた。そこへ一人の男が董卓に斬りつけた。董卓はかろうじてそれをかわし、近くにいた呂布に助けを求めた。

「呂布よ。あの者を見せしめに斬るのだ。この董卓に逆らう者が出ないように八つ裂きにしてしまえ。」

呂布は無言で腰の剣を抜き、そのまま振り下ろした。そして、その場に一輪の紅い華が咲いた…

「呂布、貴様…よくも…」

李確達は董卓が斬られたのを見て、一瞬何が起こったのかわからなかった。が、すぐに正気に戻り、腰の剣に手を掛けた。呂布は

「動くな！貴様たちもこうなりたいか！」

そう言っただけで方天画戟を突きつけた。そう言われ、李確達は一步後ずさりをした。呂布はその場にいた者たちに大声で語りかけた。

「俺は逆臣を討ったのだ。こいつこそが真の逆臣ではないのか！こいつのやったことで虐げられてきたものは星の数ほどいる。それでもコイツの味方をするものはいるのか！」

李確達は呂布の言葉に剣に掛けていた手を力無くおろした。

その後、呂布は李確達董卓派に急襲を受け、長安を追い出され、王允は彼らに八つ裂きにされ、命を落とす。貂蝉は呂布に付き添い、各地を転々とする事となった。

呂布は袁術、劉備と転々とし、ついに最期の地、下邳の城に入っていた。城は劉備、曹操連合軍が包囲していた。そして、ついに開戦の時がやってきた。

先陣の夏侯惇は呂布軍の將張遼の軍と激突した。張遼は呂布軍の中でも呂布に次ぐ武を持つ猛将であった。彼が率いる騎馬隊は曹操軍で最も機動力を持つ夏侯淵の騎馬隊など足元に及ばないほどの機動力と突撃力を持っていた。曹操軍の猛将と言われる夏侯惇とはいえ彼を相手にするのは荷が重過ぎた。徐々に押されつつある夏侯惇軍に更なる追い打ちがかかった。弓兵部隊が放った一本の矢が夏侯惇の左目に命中した。しかし、夏侯惇は一瞬怯むも逆にそれを気に奮起し、奮闘していた。その姿に曹操軍の士気は上昇し、呂布軍はそれに恐れ戦いた。

兵達の士気が増した曹操軍は勢いのまま押して行った。呂布はついに籠城を決めて城に立てこもった。季節は冬將軍が訪れようとしていた。

正直に言って戦局は最悪であった。既の監督官は我が軍を裏切り、馬を連れ、曹操軍に降り、袁術に援軍要請を頼みに使いを出したが、尽くあの桃園の三義兄弟に妨害され、八方塞であった。さらに曹操は堰き止めていたと思われる水を下不城内に溢れさせた。この戦局を逆転させるために張遼や陳宮の策で今宵夜襲を掛けることになった。そして、俺は夜襲の前に妻のもとに行った。

私は最早この戦に勝算が無いことを悟っていた。呂布は戦の前には正室である彼女のところに行っている。そこから帰ってくる頃には一刻前の軍議で出した答えを返していることが多々あった。そして今回も…

「今回の夜襲は止めだ。」

「どういふことですか！？それは！」

張將軍は呂布のその言葉に反論した。それは張將軍だけではなく、臧覇や陳宮達諸將も揃って反論の意を示した。

「何も言ふな。もう決めたことだ。」

今回も呂布は正妻である彼女の言を受け入れたのであろう。陳宮や将達が勝つための策を献策してきても呂布があゝの状況では勝ち目は無い。そして、私はある時、臧覇達が密談をしているところに出くわした。内容は曹操のもとに降るというものだった。私はそれを見ぬ振りをした。養父亡き今、私はもう呂布に尽くす必要も無いのだ。そして、私は直属の兵の一人を呼んだ。すると音も無く部屋に一人の青年が現れた。

それは青年というよりもまだ幼さを残す少年であった。

「お呼びでしょうか。貂蝉様。」

この少年は性を？、名を叡、字を志載と言う貂蝉直属の近衛兵であった。

「志載：あなたただけでも曹軍に降りなさい。あなたほどの力を持っているなら、ここににいるよりも重く用いてくれるでしょう。」

志載と呼ばれた少年はその言葉に

「…貂蝉様はどうなされるおつもりでございますか？」

貂蝉はしばらく黙り込んだあと、静かに口を開いた。

「私はここで命を絶ちます。あの男は気に入った女人を見れば我が物とし、慰み物にするような男：そのような扱いをされるくらいならいつそのこと…」

貂蝉の言葉を遮り、

「本当にそれで後悔はされませんか？あなたにはまだやらねばならぬことがまだあるはずです。目的が達成されるまで曹操からなど、この私が貂蝉様のことは御護り致します。ですから、このような場所死ぬなどとは仰らないでください。」

「ですが、捕まってしまうば…」

「大丈夫です。私に妙案がございます。」

そう言つて、？叡は不敵な笑みを浮かべた。その夜、曹操軍本陣では騒動が起きていた。

曹操は夜中に起きた騒ぎで目を覚ました。陣幕から出て、大声を上げた。

「何事じゃ！」

曹操の近くにいた兵は曹操に現状の報告をした。その兵の報告によると、どうやらこの陣の中に敵兵が紛れ込んでいるらしい。しかし、その兵は変装をしているらしくどこにいるかわからないそうだ。その侵入者は諸将の陣幕に手紙を置いているのだ。しかも、今夜、この陣営の將に勝負を挑むというのだ。曹操は不快にも思ったがこの大胆不敵な敵を一度見てみたいと思った。

典韋が構えている陣営でも同じような騒動が起きていた。典韋はこの原因を究明しようと陣幕から一步出た時、おぞましいほどの殺気を背後から感じた。振り向くと先程まで典韋が座っていた椅子に一人の少年が座っていた。

「悪来典韋つてあんたの事だろ？」

真極牛頭を握りしめる手に力込め、

「だったら、どうだと言うつてんだ？」

「そんなに気を張らなくてもいいよ。命までは取りはしないからさ。」

そう言うと同時にその少年はそこから姿を消した。

「ど、どこに行きやがった！」

「へえ、なかなか凄い武器だね。でも、使っている人がこれじゃ、宝の持ち腐れって言うのかもしれないね。」

背後から声がして典韋が振り向くと、真極牛頭を軽がると片手で振りまわす少年がそこにいた。

「この餓鬼が！」

典韋は顔を真っ赤にして、突進してきた。少年は軽くそれをかわし、一瞬にして、典韋を後ろ手に縛り上げ、一撃の当身で典韋を落とした。そして、少年はその場から煙のように消えた。

「いつ敵が来てもいいように準備を怠るな！」

先の戦いで隻眼の将となった、夏侯惇は大声を上げて兵たちに指示を出していた。

「大変ですね。先の戦いで片目を失くしたって言うのにもうこんなに動き回っているなんてまさに化け物ですね。」

夏侯惇は振り向かず

「貴様、何者だ…」

「何者かと聞かれましても、今はあなたの敵としか言いようが無いですね。一応、今は呂布軍に所属していますから。」

夏侯惇は滅麒麟牙を握りしめ、振り向きざまに薙ぎ払った。しかし、滅麒麟牙は空を斬った。そして、それと同時に松明の日が落ちた。辺りは闇に包まれた。

「どうですか？夏侯惇殿、私がどこにいるかわかりますか？」

「フン、その言葉そっくりそのまま貴様に返そう。」

「私には将軍が見えていますので…」
「貴様こそそれほどの殺気を放っていたらこの俺にも手を取るようになるわ。」

「なるほど…では、これならどうでしょうか？」

そう言った瞬間、対峙した者の殺気が高まったのを夏侯惇は感じた。それと同時に四方八方からその殺気が夏侯惇に襲い掛かった。

「何！？一人ではなかったのか！？」

「何を言っているのですか？私一人ですよ。」

夏侯惇の耳元でしたその言葉と同時に夏侯惇は後ろ手に縛り上げられ、一撃の当身で気絶させられた。その後、同様のことが許？の身にも起こっていた。

「一体、何が起きたのだ…」

曹操の目の前には縛り上げられた。三人の将が横たわっていた。そして、後ろには明らかに三人よりも小柄で武器と言う武器は何も持っていない少年が立っていた。

「曹操殿…ですか？急な話ですが私をこの軍の将として加えさせて頂けないでしょうか？」

「おぬしは何者じゃ？」

「姓は？、名は叡。字を志載と申します。現在は貂蝉様直属の近衛兵長をやっています。將軍方には失礼かと思いましたが強硬手段に出させていただきました。」

「元讓、お主、本当にこの少年に負けたのか？」

「恥ずかしい話だが事実だ…」

？叡は小柄を出して、三人の縄を斬った。

「我が軍に降るだけならば、このようなことをする必要は無かつたであろう。他に何か要求があるのではないか？」

曹操の言葉に？叡は笑みを浮かべ、

「察しがいいですね…曹操殿が言われるとおりです。私があなた方に降る条件はただ一つ。我が主、貂蝉様の処遇にございます。」

「ほう、貂蝉が降るといふのか？」

「そうです。それで私が先程のような所業に走ったのは貂蝉様の処遇についてです。もし、貂蝉様を曹操殿の妾にでもしようと考えるならばこの？志載。全力をもってあなたを討ちます。」

殺気を放つ？叡に四人は後ずさりをした。

「もし、快諾していただけるならこの戦にこの私が終止符を打たせて見せましょう。」

「貴様が呂布を討つというのか？」

「いえ、生け捕りにして見せましょう。その後の処遇はあなた方にお任せいたします。」

「面白い、その条件飲んだ。それができれば、貂蝉については一切何も言わん。」

「では、翌日。こちらの手はずが整い次第、呂布の方天画戟をそちらに投げ渡しますのでそれを合図に突入してください。では、これにて…」

そう言うとき？叡は煙のように闇の中に消えていった。

「劉備よ。先程の者の事をどう思う？」

「私は嘘を言っているようには見えませんが。明日になれば全て判るのではないのでしょうか？」

「それもそうだな…元讓、皆の者に言つて下丕城を包囲すると伝令を出せ。」

その言葉と同時に陣内は再び慌しくなった。

翌日、？叡は貂蟬の協力を得て、呂布を酔い潰れさせ、呂布の生け捕りに成功した。城内の諸將の心は既に呂布には無かったため、城を明け渡すのは簡単だった。そして、数ヶ月に及んだ戦はたった一人の兵の手でここに終幕を迎えた。

呂布は首を討たれ、呂布に従っていた将たちは曹操軍の将として扱われた。貂蟬は？叡の思惑通りに銅雀台に入れられることは無かった。

呂布が討たれて、一年が経った。この一年の間に曹操は土台を固め、北の袁紹にも負けぬ人材を擁していた。袁紹と戦いも間近に迫った時、都には曹操の暗殺を目論む者達がいた。

その中心人物は時の皇帝献帝とその臣下である陶謙が中心となっていた。その計画には西涼の豪族である馬騰、そして、梟雄と言われ、関羽や張飛と言った武將を擁していた劉備もそこに名を連ねていた。この一件に関係した者達は劉備らを除いて、全て尽く首を刎ねられた。辛うじて危機を逃れた劉備らも散り散りになっていた。

曹操暗殺計画の首謀者とその一族郎党が処刑されてからどう見ても貂蟬様の様子はおかしかった。最初にその話を俺が聞いて、それを貂蟬様に話した。その話の中で西涼の馬騰の名が出た時、何か思い出したように顔を歪め、その場に倒れこんだ。

？叡は毎日、今日は何があつたと、逐一報告してくれた。曹操の妾になることは無かつたが世間で何があっているかなどを知るには不便だった私を気遣ってくれてのことだった。

そんな話の中で、ある日、曹操暗殺計画の話が出た。首謀者の一人、“西涼の馬騰”の名を聞いた時、激しい頭痛が私に襲い掛かってきた。そして、そのまま私の意識は彼方へ飛んでいった。

鬼神の末路（後書き）

新しいキャラクターが登場しました。彼はこの話を書いていく中で、このあたりでこんなキャラクターがいればいいんじゃないかと思い、突発的に入れ込んだキャラクターです。登場させたことで一つだけ後悔していることは彼が下手すれば主人公の位置を横取りしてしまいそうな気がしたことです。

彼は流浪の身であつたのを貂蟬に拾われ恩を感じている一人の青年です。彼はこれからも貂蟬の熱狂的ファンクラブ会長…もとい、忠実なる親衛隊隊長兼貂蟬軍参謀として大活躍していただきます。

呂布は天下無双の豪傑でありながら、その人生を他人に大きく流された人生だったように思います。しかし、それと同時に思った通りに生きることが儘ならない時代に他人に流されつつも、その思いのままに生きた呂布はある意味すごい人物だったんだろうなと思えます

邂逅の憧関（前書き）

西涼の馬一族の処刑の話を聞いた挑戦は氣を失ったそれはいつたい何を意味するものだったのだろうか…

邂逅の憶閑

突然、倒れた貂蝉様を支え、寝台まで運んだ。しばらくすると貂蝉様は目を覚ました。

「どうなさったのですか？急に？それよりもお体のほうは大丈夫でしょうか？」

俺がそう尋ねると

「？叡、先程の西涼の馬騰殿について、もう一度聞かせてくださいませんか？」

その問いに、

「構いませんが無理をしないでくださいね。俺の知っている話では馬騰殿は西涼を統治している豪族です。羌族達遊牧民族とも交流があり、彼が指揮する騎馬隊の機動力は恐ろしい物があります。今回、処刑されたのはその馬騰殿とその息子馬鉄、馬休の二人を中心とした一族郎党全て誅殺されています。馬一族でこの難を逃れた人物に親族の一人馬騰殿の甥である馬岱がいます。少なからずともまだ生きています。嫡子である马超殿は西涼にいたために無事のようです。父の馬騰殿に似た性格ということですのでしばらくしたら彼は曹操に戦を仕掛けてくるかもしれません。私がわかつているのはこの位でしょうか。」

しばらく沈黙した後、貂蝉様はあることを口にした。

「馬一族の方々の遺体を丁重に供養できないでしょうか？」

自分でも何を言ったのかわからなかった。

「突然、何を言い出すのですか！？それは流石に無理だと思いますが…どうしても言われるのであれば、夏侯將軍や張將軍に交渉くらいはしてみますが…それにしても突然どうなされたのですか？」
私は再び沈黙した。

「なるほど…それは貂蝉様の記憶…に関係しているのですね？」

志載の言うことは凶星だった。返答に窮していると

「まあ、何とか立ち回ってみましょう。」

「すみません……」

そう言っていると、志載は優しい笑みを浮かべ、

「気にしないでください。これも一つの恩返しですから……貂蟬様のおかげで日の当たる世界に戻って来ることができたのですから……これくらいのこと何て事はありませんよ。」

そう言って、志載は静かに部屋を後にした。

あのように答えたのはいいのだが、ハッキリと言ってしまえば不可能に等しかった。既に処刑されてしまい、首は晒されている。その上に胴体は最早どこにあるかはわからなかったのだ。丁重に弔うつまわり、遺体が無いことにはどうしようもない。せめて、馬騰、馬鉄、馬休の三人だけは弔えるようにしてやりたかったのだがそれすらも不可能であった。交渉するとは言ったものの降将である張遼將軍は下手をすれば立場を悪くしかねないので相談するわけにもいかず、思い悩んでいた。

最早、できる事もなく最後の手段に出ることにした。夜になってから三人の首を奪い取ることにしたのだ。夜中に首を監視しているものなど一人もいなかったので取る事は簡単だった。さらに今回の件では三百近い人間が処刑されていたので三つ首が無くなっていてもわかりそうにはなかったのだ。

首を奪取し、俺は都の外にまで来ていた。そこで三人の髪を整え、髪を切り、首だけを茶毘（火葬）にした。国では茶毘は禁じられていたがこのまま持ち歩くわけにも行かず、骨を三つの骨壺にそれぞれ収めた。そして、それを持って貂蟬様がいる屋敷まで走った。

？ 叡が屋敷に戻ると貂蟬はすぐに三人の供養をした。骨壺に納められた三人の骨は長江を眺める丘陵に埋葬され、そこに簡易的にで

はあつたが慰霊のために墓を作った。そして、？叡に西涼にいる嫡子のもとへ遺髪を運ばせた。？叡は愛馬“烏騅”を駆り、西涼までを駆けていった。

西涼の地に入り、中でも一際大きな屋敷に入った。中は物々しく殺気立った兵たちで溢れ返っていた。

「門衛に馬騰殿の嫡子、馬超殿に届け物があるのだが取り次いでもらえないか。」

と告げると、門衛の一人は訝しそうな顔をして門衛の一人を走らせた。

しばらくして中から艶やかな鎧を身に纏った武将と二人の武将が先程の門衛に連れられて出てきた。

「この俺が馬超だ。この俺に届け物とは何だ。」

そう言つて俺のほうを見据えた。

「届け物とはこれのことです。」

そう言つて三つの遺髪を馬超に渡した。

「これは……」

後にいた武将の一人が何かを言おうとした。すると、もう一人の武将が

「遺髪ですな…これはもしや……」

「そのとおりです。先代当主、馬騰様。そして、その息子様の馬鉄様、馬休様の物です。」

「キサマ、何者だ。返答次第ではただでは済まさんぞ……」

？叡は包み隠さずに自分の身を明かした。

「元呂布軍、貂蝉様直属の近衛兵、？叡。字は志載といいます。現在には曹操軍に所属しています。」

曹操、その名前を聞いた瞬間に馬超は剣を抜いて斬りつけてきた。その剣は首の横で寸止めされた。？叡は瞬きもせずに見てい

た。

「何故避けぬ。そのような芸当ができるのであれば腰の物で俺に斬り返すくらいのができたのではないのか？」

「殺気を感じなかった。だから、避ける必要は無いと思い、避けませんでした。」

後で眺めていた。馬岱と？徳は二人のやり取りに驚いていた。馬超は声をあげ、笑い出した。それを見てさらに二人は眼を丸くしていた。

「要求はなんだ。」

そして、？叡は馬超に一言告げた。

「この出陣どうかお止めください。今はその時ではありません。」

馬超はその言葉に

「何故そのようなことを言う。」

「今、曹操は北の袁紹との戦をすすめています。同等の力を持つ二つの勢力。どちらが勝っても被害は少くないでしょう。」

「それならば余計に挟撃を仕掛けることが可能な今こそ出陣すべきではないか？もし、曹操が討たれでも……」

「多分、曹操が勝つでしょう。そして、勢力は今よりも大きくなるでしょう。」

「それならば余計に……」

「他の勢力、特に南の呉が黙ってはいないでしょう。近いうちに必ずこの二勢力同士の戦は起きるでしょう。おそらく、この戦は水上での戦いとなります。水軍を擁しておらず、遠征となる曹操軍には不利な戦いになるでしょう。この戦いで被害は袁紹との戦には比べ物にならないほどの被害を受ける事になるでしょう。更にもう一つ、曹操軍は少なくとも華北からの遠征となるため、兵も疲弊しきっています。叩くならここで叩くべきだと私は思います。これが、私が今では無いと言った理由でございます。どうですか？」

この？叡の読みに三人に呆気は取られた。

「…キサマ、何者なんだ？」

「従兄上の言うとおりです。」

「確かに…乗っている馬にしても兵卒や近衛兵が乗れるような馬ではない。」

確かに？ 叡が乗っている烏騷はあの赤兎馬に負けぬほどの名馬であった。烏のように黒い色をしながらもその鬣と尾は真つ白、いや、むしろ銀に近かった。この馬を見た武将達は誰しもがこの馬を譲ってくれと言ってきていたのだ。

「先にも申し上げたように私は貂蟬様直属の近衛兵です。まあ、密偵のようなものも兼ねていますが…この馬は以前に仕官をする前に野で巡り逢ったもの。貂蟬様は馬を持っていましたし、ましてや主君でもない董卓や曹操に献上する気にはならなかった。そのために私が乗っているというだけです。」

その言葉に馬超は気付いたことを尋ねた。

「父を供養しようと言いだしたのはお前ではないだろう。お前の主君であるその貂蟬だな。貂蟬とは何者なんだ。お前程の者が付き従っているんだ。只者ではないだろう？」

馬超の問いに？ 叡は

「ただの舞姫です。信じられないほどの美女ですが…私にとっては野にいた頃に私を救ってくれた命の恩人。そして、生きている人間で唯一私の心の闇を知っている人です。呉の戦いの後、共に戦に出ることになるでしょうからその時にでも再び逢いましょう。それでは。」

そう言つて、烏騷を駆り、？ 叡は立ち去った。？ 叡が立ち去った後、

「敵には回したくない奴だな。実に惜しい…」

「確かにそうですな…」

「私と同じ位だったのだが、本当に未恐ろしい方だ。」

と、三人が溢していたのを？ 叡が知ることは無かった。

？ 叡が屋敷に戻る出陣し終えた後で貂蟬も従軍しているようだった。戦支度を済ませると再び、烏騷に乗り、そのまま、駆け出した。

官渡の地に両軍は対峙していた。曹操軍は一人の猛将に苦しめられていた。そう軍の名だたる将が文醜に挑んだが、どの将も撤退を余儀なくされた。先程、夏侯惇が手傷を負い、撤退してきたのだ。そして、今、その猛将文醜が率いる軍と貂蝉軍は激戦を繰り広げていたが貂蝉軍は劣勢に陥っていた。文醜と戦う貂蝉が駆使する金麗玉錘が弾き飛ばされ、貂蝉に剣が振り下ろされた。しかし、甲高い音がしてその剣は折れ、剣先は弾き飛ばされた。

「申し訳ありません。遅れました。さあ、早く撤退しましょう。」
済んでのところで文醜の剣を？叡が愛槍“龍爪尖”で叩き折ったのである。貂蝉はハッとして自軍を撤退させた。

その後、顔良という武将も出てきたが、文醜ともども関羽の青龍堰月刀の錆びとなってしまうた。その後、曹操は烏巢の袁紹軍の兵糧庫を襲撃し、袁紹軍を撃ち破った。

中原を制圧した曹操は劉備や孫呉を討つために軍を発した。しかし、馬超のところで？叡が予測したように曹操は赤壁で大敗を喫していた。これを機に西涼の馬超は西涼の自身が指揮する騎馬隊二万を率いて、韓遂と手を組み、兵を起こした。曹操はこれに自ら出陣し、夏侯淵、許？等の将を引き連れ、これに対峙した。その中には貂蝉が率いる一軍もあった…。

潼関の地で対峙した馬超軍は持ち前の機動力を活かした、騎馬隊で次々に曹操軍を撃ち破っていった。曹操軍はそれに対し、城を築こうとするが、馬超軍の妨害により作業は進まなかった。しかし、そんな時に現れた一人の老人の進言で、一夜で城を作り上げたのだった。停滞する戦況に業を煮やし、馬超軍は曹操軍に挑発を掛け続けた。ついにそれに乗ってきた夏侯淵の一軍を打ち破り、このことから許？は馬超に一騎打ちを挑んだ。勝負はなかなか着かず、両軍はこれを見守っていた。

貂蟬と？叡はこの勝負を城壁の上から眺めていた。

「さすが錦馬超と言ったところですね。」

誰もが馬超の豪華絢爛な姿を賞賛せずにはいれなかった。

「ええ…次の総力戦では…」

「多分、我らの軍と戦うことになりそうですね…」

翌日、貂蟬の軍は曹仁、徐晃の軍と共に出陣することとなった。

貂蟬軍に対峙したのは馬超の懐刀でもある？徳の軍であった。兵力は同等、まさに互角の戦いであった。戦局も佳境に近づいた時、貂蟬と？叡は馬超軍の将、？徳と対峙した。？叡の顔を見て、

「？叡殿…久しぶりですな。」

「やっぱり出逢ってしまいましたね…」

そう言つて？叡は苦笑した。

「そして、そちらの女性が…」

貂蟬を見て、？徳の表情は一気に変わった。

「せ、仙玉！仙玉ではないか！？」

近付こうとする？徳と貂蟬の間に？叡は立ち塞がり、

「何を言っている！彼女があの時言っていた我が主君、貂蟬様だ。」

「仙…玉？」

その名前を聞いた時、私の中で何かが起こった。それと同時に拒絶反応が起き、私の意識は遠のいた。

急に貂蟬様は倒れ、落馬しそうになっていた。

「貂蟬様！」

「仙玉！」

？叡は貂蟬の体を支え、二人同時にそう呼びかけたが貂蟬様からの反応は無かった。

「？徳殿、ここはお互いに退きましよう。決着は次の機会に…」

？徳は納得できてはいないようだったが何も言わずに軍を退いた。

「？徳は本陣に引いて事の次第を馬超と馬岱に伝えた。」

「何！仙玉が生きていただと！それは事実か！令明。」

「本当ですか！？？徳さん。」

二人の問いに？徳は

「ああ、事実だ。とりあえず二人とも、落ち着いてくれ。？叡殿は貂蝉と呼んでいたが彼女は絶対に仙玉だ。十年近く会えなかったが彼女は某の妹、？仙玉だ。」

「落ち着かれましたか。貂蝉様…」

「ありがとうございます。志載…」

沈黙が続いたがその沈黙を破ったのは貂蝉であった。

「はつきりと思い出しました…お義父様に引き取られるまで、私は西涼の馬家に仕えていた？家の者です。」

「と、言うことは先程、？徳殿が言われたことは…」

貂蝉は小さく頷き、

「事実です。これは記憶を失う前から持っていた物で、これと同じものを私の兄“？徳”も持っているはずです。」

いつも架けている首飾りを外し、？叡に差し出した。

「あなたには申し訳ないと思っています。」

そう言つて貂蝉は頭を下げた。

そんな貂蝉様を見て、俺はため息をついた。

「何を言っているんですか。貂蝉様。いえ、仙玉様。これは喜ばしいことではありませんか。それよりも今考えねばならないのはこの先のことです。仙玉様の素性が判明した以上ここにいるのは危険です。他の者に知られることにでもなれば大変なことになります。何か対策をたてなければならぬでしょう。それに仙玉様も血を分けた人間と争う事はやりきれない物があるでしょう…」

「志載…」

心配そうな仙玉様を見て、

「大丈夫です。私にとってあなたが貂蝉様であつても仙玉様であつても…いえ、それ以外の何者であつたとしてもあなたがあなたであることに何も変わりはありません。私にとってあなたは身命を賭して守るべき主君。それだけで良いではありませんか。」

俺はそう言つて陣を後にした。そうである。俺は仙玉様に命を捧げたのだ。この命がある限り、仙玉様に仕えることがこの？志載の生きる意味なのだ。我が主君の大事に命を懸けることができないようであれば俺の生きている意味などないのだ…

新たなる旅立ち

新たなる旅立ち

西涼軍馬超の陣幕では、馬超、？徳、馬岱の三人が仙玉を奪還する為の策を練っていた。しかし、曹操軍の警備網は嚴重で蟻の這い出る隙もなかった。その為にこれと言う策という策は出ないまま、時間だけが刻一刻と過ぎていった。

如何に西涼が誇る猛将といえども、生き別れになった身内と刃を交えるなどできるわけはなかった。そして、このことを曹操の間者に知られて、仙玉が人質にでもされようものならば戦局は一変しかねなかった。憂いを断ち、曹操を討ち一族の無念を晴らすためにも仙玉の奪還は最優先事項であったのだ。そんな時、馬超の陣幕の中の灯が風に揺らめいた。

馬超、馬岱、？徳の三人はいずれも死地を切り抜けてきた将であり、その武は古今無双というに相応しい者達であったが、その誰もがその侵入者に接近に気付かなかったのだ。もし、これが暗殺者であったならば彼らは既にこの世にいなかったであろう。

「いつの間に入って来たんですか……？」

そう言つて、傍らの剣に手をかけた。臨戦状態にある馬岱を馬超は制し、

「昂嬰の言つとおりだ……だが、お前程の者が理由も無く、敵陣の真つ只中にやつて来る訳はないだろう？」

馬超を見据えて、？叡は

「流石ですね……今日は馬超殿達の考えを伺いに来ただけで戦う気は一切ありません。」

「私達の考え？」

「それ聞く前に一つ確認をします。？徳殿。あなたはこれと同じ物をお持ちですね。持っているのならば私にそれを見せてください。」

「そ、それは…」

「はい、貂蝉様が肌身離さずに持たれていた首飾りです。」

「確かに某はそれと同じ物を持っている。これがそうだ。」

「徳はそれを？ 叡に差し出した。」

「確認しました。では、単刀直入に伺います。あなた方は我が主君貂蝉様、いえ、？ 仙玉様をどうしたいと思っておられるのでしょうか？」

「仙玉は我が妹。馬超殿にとっては一人の許嫁なのだ。」

「仙玉と戦うことはできない。しかし、曹操を討つことは我が一族にとつての悲願。仙玉を奪還した暁に曹操を討つ。そう決めている。」

「それは仙玉様を何があっても守り通すということでしょうか？」

「答えるまでも無い。」

「…わかりました。それでしたら、この？ 志載、全力をもって、あなた方の援護いたしましょう。」

それを聞いて、馬超は

「なぜ、俺たちに協力をしようと思ったんだ？ 仮にもお前は曹操軍の将。このことが知れたら、確実に…」

「…確かに私は曹操軍の将ですが、臣たる者、二主に仕えるべからず…あくまで主君と決めているのは仙玉様ただ一人。たとえ、黄金一万を渡すと言われても私が使えるのは仙玉様ただ一人。仙玉様が皇帝を討てと命じられれば、この手で必ず討ち取ります。」

そう言い切る？ 叡に迷いというものは感じられず、その目に曇りはなかった。

俺は馬超殿の陣幕から出て、西涼の将の一人である韓遂の陣幕の前を通ったとき、そこに曹操軍参謀賈翊によく似た人物が入っているのを見たが、その時は気にすることもなかった。しかし、それは大きな後悔を残す事となった。

昨日、伝えたように曹操軍の先陣は貂蟬、夏侯淵の率いる軍勢五万であった。それに対し、馬超軍は直属の精鋭と共に来た西涼の兵達二万で対峙した。

俺は開始の合図と同時に烏騾を駆り、馬超軍に立ち向かった。仙玉様の援護を行いつつ、戦いながら徐々に西涼軍を押し返していった。そんな時、西涼軍の大将、馬超を見つけ、仙玉様に合図を送り、俺は自ら馬超の前に出て馬超殿に打ちかかった。馬超はそれを難なく受け止め、鏑迫り合いに持ち込んだ。十合ほど打ち合うと形勢不利と見た馬超は撤退を開始した。それを合図に

「さあ、この戦、今日で終わらせるぞ！皆続け！追撃をかける！」俺はそう皆に呼びかけ、追撃を開始した。夏侯淵軍もそれに応え、貂蟬軍の後に続いて追撃を開始した。左右を小高い山に囲まれていたところを通り抜けようとしたときだった。左から馬岱軍、右から？徳軍が伏兵として現れた。

昨夜、？叡は俺達に一つの策を残していった。

「明日、曹操軍第一陣に仙玉様、夏侯淵と共に出ます。その時、馬超殿自らこれに当たってください。そして、ある程度戦い、負けを装い撤退してください。これに我らが追撃をかけます。もちろんこれに夏侯淵も追撃をかけてくるでしょう。そこでこの左右が林に囲まれたここに馬岱殿、？徳殿が伏兵として控えていてください。お二方が攻撃をした後は私が何とかしますから、二人の軍で夏侯淵軍を足止めにしていただきたい。」

この策は見事に成功し、三方から攻め立てられた夏侯援軍は為す術がなかった。あと少しで夏侯淵を討ち取れるかというところで俺の元に一人の伝令がやってきた。

「本陣が炎上しております。直ちに救援を！」

それを聞いて、俺はその場を二人に任せ、単騎で本陣に向かった。

しばらく戦闘を続け、？徳の姿を確認するとその前に躍り出て、

打ちかかった。そして撤退を促した。そして、そのとき予想もしていなかったことを知った。それは西涼軍本陣炎上の報せであった。仙玉様に軍の指揮を任せ、自ら西涼軍本陣まで一気に駆け抜けた。

馬超は西涼軍本陣に着いて目にした光景を疑った。そこでは味方であるはずの韓遂の兵が味方の兵達を次々と討っていたのだ。馬超の姿を確認した兵たちはその矛先を馬超に変え、一気に襲い掛かってきた。難なくそれを回避した馬超の前に韓遂が姿を現した。

「韓遂殿！これはどういうことだ。」

「計画通りに事を運んだだけだが？」

「何故あなたが裏切るといふのだ！あなたは我が父とは義兄弟の契りを結んだ仲だったはず。それが何故！？」

「確かにそうだが、お主は知らんのだな。わしと馬騰は昔から西涼の統治を争った仲であった事を…そんなときだったよ。曹操から誘いがあつたのは…最も旧知の仲であつた曹操の頼みだ。断るのも悪かろう。」

「曹操様はもし、韓遂殿が馬超の首を持って来れば韓遂殿を西涼の統治を任せると。」

「キサマは確か…」

そこに現れたのは曹操軍参謀の賈翊であつた。

「無駄話はこの程度にしてそろそろ貴様には死んでもらおうか。」

そう言つて、韓遂が手を上げると韓遂の背後から弩兵が現れた。

「西涼の錦馬超もこうなつては形無しだな。十年前同様、こうも容易く成功するとは…」

「ま、まさか…母上や？家の者達を殺したのは…」

「そうだ…冥土の土産にひとつ昔話をしてやろう。十年前のあの日、家がそろつて長安に物見遊山に行くという話を聞いて、わしは馬騰にいや、馬家の者全てに最高の悲しみと苦しみを送りつけてやろうと思つてな。周辺に根城を持っている山賊たちを金で雇い、襲撃させたのだよ。事は物の見事に成功した。」

「おのれ…キサマが母上を…」

「昔話はここまでだ。さあ、弩兵達よ。錦馬超を射殺してしまえ！」
怒りを抑えることはできなかった。が、最早どうすることもできなかった。そう言つて、手を振り下ろした。俺は覚悟を決め、目を瞑った。

しかし、いつまでたつても矢は飛んで来ずその代わりに何かが倒れるような音がした。

「あなたは何者ですか？」

「兵卒の一人ひとりの顔までは流石に覚えていませんか…賈翊殿、あなたの策は裏目に出たようですね。あなたが他の將軍達にこの火計の事を知らせていれば、今頃、馬超殿を討つ事は容易だったでしょうが、欲を出したがために最大の手柄を逃すとは愚かとしか言いようがない…」

目を開くと目の前には腕を射抜かれた弩兵が呻き声を上げながら倒れていた。背後に燃え盛る炎が控えていたために最初はそれが誰かが判らなかつたが近づいてくるにつれてその姿が明らかになった。

「お、お前は…？ 叡！」

「ご無事ですか？」

「何故ここに…？」

「それよりここから撤退いたしましょう。」

そんな二人を見ていた韓遂は、

「ここまで追い詰めたのだ。逃がすわけにはいかん！」

両手剣を抜き、斬りかかつてきた。

「その程度で我等を斬れると思つていいのか！」

そう言つと、？ 叡はその剣を受け流し、韓遂はそれでも諦めずに斬りかかつてきた。

すかさず俺の龍牙閃は空を切り裂き、韓遂の左手を斬り落とした。

韓遂はあまりの痛みにその場に蹲り、もがいていた。

「韓遂…先ほどの話は聞かせてもらった。？ 家の者を皆殺しにした…つまりは仙玉様の母君をも殺したと言つこと…俺はキサマを許せ

はしない…だからと言ってお前を殺したところで仙玉様の大切な物が戻るわけではない。せいぜい生かされた生命、大切にするがいい…」

その形相は幾多の戦場を駆け抜けた马超ですら背筋が凍る思いだった。

「马超殿…急ぎましょう。皆が待っています。」

「あ、ああ。わかった。」

「賈翊殿。次に戦場でお会いすることがあれば全力をもって討ちます…拾ったその命を大事にするんですね。それでは…」

？ 叡はそう言い残し、俺たちはこの場を立ち去った。

？ 叡が马超の後を追いかけて言った後、仙玉は撤退をしようとする西涼軍に更なる追撃を仕掛けた。その後から、夏侯淵も追撃をかけようとするが、第二陣の曹仁、徐晃の二人の軍が追いつき、夏侯淵の追撃を制止した。半刻ほどして一人の伝令が走りこんできた。

「伝令！ 貂蝉軍！ 敵の伏兵により壊滅。生死の確認もはや不可能です。さらにこの先伏兵が隠せそうな湿地帯が広がっています。」

その伝令を聞いた三人は

「どうするべきでしょうか…？」

「一度退いて殿の指示を仰ぐべきだと思うが。」

「それもそうだな。伏兵がいるとなれば、こっちの被害が大きくなるばかりだからな。」

曹操軍本陣に戻った三人は今回の戦いの状況を曹操に伝えた。ここで曹操は貂蝉軍壊滅の報せ、そして、三人が火計の事を知らされていないことを知った。

「このうつけ者目！ おぬしが夏侯淵達に火計の事を伝えておけば、あの马超を討ち取ることができたのだぞ！ あの男は将に真の虎将というに相応しい武将なのだ。野放しにしておくにはあまりにも危険すぎるのだぞ！」

「も、申し訳ございませぬ。」

激昂する曹操に賈翊は平伏した。

「今回の戦はお主の離間の策があつてこそそのものだ。しかし、馬超を逃したのもお主に責がある。今回の戦における恩賞は無いものと思え！」

貂蝉軍壊滅の報は真実であり、また虚偽でもあつた。？叡は今回の戦いでどうしても貂蝉に死んでもらう必要があつたのである。それは貂蝉に？仙玉としての第三の人生を踏み出してもらふ為には必要なことであつたのだ。

仙玉は先に行き、待機していた実兄？徳、幼馴染の一人馬岱と無事に合流を果たすことに成功した。

「お兄様…馬岱…」

「よく無事だつた…」

「本当によくご無事でしたね…」

「？叡がよく助けてくれましたから。」

「これで従兄上がいれば久方ぶりにそろいますね。」

馬岱のその言葉に遅れて合流する予定の二人を待った。

しばらくすると、遠くから二人が馬を駆りかけてきた。馬超と？叡は皆の無事を確認すると安堵した。そして、？叡は仙玉を馬超の元へと促した。仙玉は顔を赤らめつつ、馬超の前に歩み寄った。馬超はそんな仙玉を優しく見守り、

「良くぞ無事に帰つた…本当にうれしく思う…」

「私もうれしく思います。」

？叡は到着と同時に我らの元に来て、

「最後の仕上げに取り掛かりましょう。」

「最後の仕上げですか？」

「そうです。これからどこに落ち延びるとしても現在の状態で落ち延びることが出来る距離はたかが知れています。ですから、渭水の

地から撤退しようとしている曹操軍を叩き、補給を行います。」
私が彼の真意を知るのはまだ後になってからだった。

曹操軍は潼関での戦いで勝利を収め、渭水から黄河を渡るための船を待つ間、兵達に休息を与えていた。そのときだった。銅鑼の音と地響きと共に西涼の騎馬隊が襲撃を仕掛けてきた。戦闘は終わったものと油断していた曹操軍の兵達は為す術がなかった。さらに兵も半分以上が対岸に渡っていた為に手勢も僅かであった。次々に兵達は討たれていった。許？は曹操を船に乗せ、鞍を盾代わりにし、曹操を矢の嵐からかばった。曹操が川の中腹程に來たとき、河岸に住んでいた住民の一人が牧場内の馬を放った。西涼軍の兵達は我先にとこの馬に飛びついていった。斯くして、曹操は許？と近くに住む牧場主の機転で難を逃れたのであった。

対岸に無事に曹操が辿り着いた時には西涼軍の姿は見え、既に撤退した後だった。疾風迅雷の襲撃。多大な被害を与えて電光石火の如き撤退、それを見た曹操は虎が翼を得たことを悟り、そして、曹操は龍と虎を敵に回したことに恐怖した。

この後、曹操は馬を放った牧場主を呼びつけた。牧場主は曹操の前に引き出された。

「お主が先程牧場の馬を放ったものだな。」

「はい、勝手な振る舞いをした事お詫び申し上げます。」

「いや、詫びる必要は無い。お前のおかげで難を逃れたのだ。そこでだがこれでいいか？」

そう言つて一枚の紙を渡した。

「わ、私を諸県令に！」

「ウム、そのとおりだ。これからも漢朝の為に尽くしてくれ。」

「は、ははあゝ」

一礼をし、男は陣幕を後にした。

しかし、曹操は？叡の策の奥底まで読み取る事はできなかった。

実は？ 叡はこの渭水の近辺に住むこの牧場主の中に曹操に心酔している者がいるという情報を既に掴んでおり、渭水で曹操が襲撃を受けるらしいという事と西涼軍は馬に目が無い事を家中の者達に吹き込んでいたのだ。故に、牧場主は曹操の危機を知り、襲撃開始と共に柵を開放し、馬を切り離したのである。

？ 叡のこの奇襲での最大の目的、それは補給だったのである。そのうえ、曹操軍にも多大な被害を与えることもできていたのだからこの策は大成功であった。

渭水での奇襲により、補給を終えた馬超軍は焼け落ちた西涼軍本陣にいた。馬超は先の戦闘での戦利品の馬を兵達に分け与えた。

「皆、よく聞いてくれ。この軍は…ここで解散する。」

その言葉に馬超軍の兵達は口々に

「どうしてですか！？ 私達はまだ戦えます！ 仮に、最後の一人になったとしても必ずや曹操に…」

と言い、馬超は彼らを静めると言葉を続けた。

「皆の気持ちは俺も痛いほど理解している。だが、今回の戦、敗因はこの俺が未熟だったからだ。そのせいで韓遂に裏切られたといつても過言ではない。だからと言って俺は父、馬騰や弟達の敵を討つことを諦めた訳ではない。」

その言葉を聞き、馬超軍の一人の小隊長が

「では、馬超様はこれからどうなされるのですか？」

その言葉に馬超は

「俺は漢中の張魯の下に行く。少数とはいえ、七千ものの兵がまとまって動くのは目立ちすぎる。だから、ここで一度軍を解散する。俺は再び曹操に挑む。その時、共に戦おうと思うものがあるならば、そのときは共に戦ってくれるか？」

そう言つて、馬超は頭を下げた。そんな馬超を見た兵達は

「わかりました。その時が来れば、ここにいる総ての者が馬超様の矛となり、盾となりに馳せ参じましょう。」

と口々に告げ、一人また一人と去っていった。

そして、その場には馬超、馬岱、？徳、仙玉、？叡の五人が残った。

「では、我らも参りましょうか？」

？徳の一言で五人は

「ええ、そうですね。」

「では、漢中に向け…」

「出発いたしましょう。」

「よし、行くぞ！」

馬超たち一行は馬を駆り、一路漢中へと旅立った。

囚われの月下美人

漢中はこの時代に起こった民間信仰のひとつである五斗米道の教主、張魯が統治している国であった。五斗米道とは少し前に制圧された張角率いる太平道に匹敵するほどの信者を擁している宗教集団であった。その為に一大勢力を築いていたのだった。もちろん、朝廷や周辺諸国はこれを恐れ、何度もこれを征圧しようとするが天然の要害に囲まれた漢中を陥落させるのは困難を極めた。これに周辺諸国は制圧を諦め、朝廷も張魯に爵位を送るという形で妥協案を取っていた。そのような漢中に馬超一行が入ったのは旅を始めて一ヶ月ほどが過ぎていた。

張魯と馬超の父、馬騰とは顔馴染みだったこともあり、馬超自身も張魯とは面識があった。その事もあってか、張魯は快く馬超一行を迎え入れた。しかし、腑に落ちないことは馬超一行が来る事を知っていたかのように待ち構えていたことだった。その事を尋ねても「天からのお告げに従ったまで。」と、答えられ、それ以上の答えを聞くことはできなかった。

私達が漢中の地を踏み、一月程が過ぎたある日、漢中領内が騒然とした。ついにあの曹操が漢中を制圧するために軍を発し、夏侯淵と張？が率いる軍、二十万がこの漢中に攻め寄せてきているというのだ。私が孟起様の執務室に向かうと、そこには既に四人が集まっていた。

曹操軍到来の報せを受け、俺たち五人は俺の部屋に執務室に集まり、対策を練っていた。そんな中、漢中には、潼関で解散させた自軍の兵たちが続々と集まってきた。しかも、七千だったはずの兵はその七千の兵たちが各地に散っていた際に各地で思いを共にする者をそれぞれが引き連れて来たために兵の数は張魯が要する神兵五万、

自軍の兵一万五千を合わせた六万五千に膨れ上がった。

この一月、俺は今後の戦いの為に漢中の地を歩き回り、漢中という土地について調べて回った。その調べでわかったこと、それは漢中という地はその噂に違わず、大自然が育んだ天然の要害というに相応しく守りに堅く、外からは攻め入るには困難を極める土地であることを改めて理解した。そして、地元の人でも知らないような面白いことも多く発見した。

それはもし、ここを曹操軍が取ったとしても、再びここに攻め込む際にも活用できることであつた。

曹操軍到来の報せを受け、俺は俺自身が持てる最高の策を携えて軍議に参加した。

この一月、某は来るべき戦いに備え、自己の鍛錬や自身だけでなく兵達の訓練を怠ることは無かつた。昂嬰と共に日々鍛錬を重ね、われらの武もまた上がった。馬超殿の為、護るべき者の為、某は身を懸けて戦い抜いてみせる。

この一月、？徳殿と共に軍や自身の鍛錬に打ち込んだ。とはいえ、？徳殿の特訓は尋常ではなかつた。実際の話、この一月生きた心地がしなかつたのだ。

しかし、それだけの思いをしたこともあり、私の武は少しではあるが従兄上に近づくことはできたかもしれない。従兄上の為、この戦、必ず勝利の糸口をこの手で掴んで見せる。

五人で集まったとき、志載が私達に伝えた策は二方向から攻めてくる夏侯淵軍と張？軍をこちらにも二手に分け、叩くという物であつた。単純に聞こえたこの策は、深くその真意を私は全体の説明を受けるまでその全貌を理解することはできなかった。

五人で決めた策を全体で集まったとき、張魯に伝えた。この策に張魯は

「二手に分けるのは構わないが我々の神兵は自衛のために設立したものの、攻撃などはできぬ民兵ですぞ。」

この張魯の問いに、馬超に代わり、？叡は

「ご心配には及びません。神兵の方々に戦闘をしていく必要はございません。神兵の方々にして頂く事は我が策が完成するまでの間、夏侯淵軍を牽制して頂くだけでいいのです。こちらの軍には牽制する為の策を？徳殿、馬岱殿、仙玉様に伝えており、こちらの牽制する為にこの御三方に指揮していただきます。張？軍には私と馬超殿の二人と我ら直属精鋭三千でこれに当たります。それ故にご心配なく。」

但し、今回のこの戦、この戦闘で勝ったとしても勢力差から考えても、それは束の間の勝利にすぎません。この先、勝ち続けていくことは容易なことではありません。そこで今回の戦闘では張？軍を叩き、夏侯淵軍を牽制している間に民達を魏の支配から逃して下さない。」

「うむ、承知した。では、早速そのように取り掛かせよう。」
張魯はそう言うと、配下の者を呼び寄せ、それを城下に触れ回った。

魏の軍勢がこの漢中に攻め込んでくるまで、後二週間程度の有余があつた。その間、令明と昂嬰は神兵に戦闘の訓練を施し、俺と？叡は綿密な打ち合わせと下見を繰り返し、仙玉は俺達四人をよく援助した。この二週間、各々がそれぞれにできることを精一杯にこなしていった。

そして、ついに漢中の地に魏の軍勢が侵入してきた。正面から乗り込んできた夏侯淵軍は神兵と西涼の兵達と対峙していた。夏侯淵といえば、魏軍でも古株で歴戦の猛将であつた。神兵など、烏合の衆同然であつたのだが、その夏侯淵はそれを攻めるのに手を拱いて

いた。その理由は幾本かの旗にあった。

敵陣にたなびく一本の“帥”の字が書かれた旗。それはすなわち西涼軍の総大将馬超がいることを意味していた。馬超には潼関での戦いで幾度も苦汁をなめさせられた敵であるが為に簡単には手が出せなかったのだ。さらに二つの山頂では数色の旗が振られていた。かつて、曹仁が劉備を攻めた時、諸葛亮が二色の旗を使っているのを覚えていたが、今回は数色の旗である。赤旗を振れば、青旗を。青旗を振ったと思えば、今度は黄の旗で返している。他にも何色かの旗で返したりしているのでこれでは何か策を弄していると疑わずにはいらなかった。

？ 叡と馬超は三千の精鋭を率いて両側を断崖に囲まれた漢中への山道に陣取り、山道を塞ぎ、張？軍を待ち受けていた。ここを通らねば、漢中の地を踏むことはできないため、張？軍はここに控えた馬超軍を打ち破るしかないのだ。そして、張？軍と馬超軍はここに対峙したのだった。

山道よりこの地に入った私達の軍はこの地の霧の濃さに驚いた。

しかもこの地の霧は普通の物とは違い、地表に這いつくような霧であつた。この道を進んでいくと目前に一つの軍勢が現れた。軍の指揮者はどうやら西涼の馬超。数はおよそ三千程度、我が軍の一割もおらず、この程度の軍勢であれば、いくら馬超がどんな策を弄してこようとびくともしそくに無かつた。しかも陣はお粗末な物で、ただ中央に固まっているだけのお粗末な陣であつた。

「その陣立ては少々美しさにかけるようですね。この張雋艾が華麗なる陣立てというものを見せて差し上げましょう。」

そう言つて、我が軍も陣を展開した。

対峙した翌日、先に動いたのは馬超軍であつた。早朝、馬超軍は銅鑼を鳴らし喊声をあげ、張？軍に襲撃を仕掛けた。それに張？軍

も応対し、進軍を開始した。張？軍は数で押し、すぐに馬超の陣に迫った。しかし、その陣に人影は無く、松明が赤々と燃えているだけであった。そして、その陣には時と共に深い霧が立ち込めてきた。それと同時に張？軍の背後より喊声上がり、濃霧からは黒い人影いくつも出現した。更には宙にかつての同胞であった？叡が現れた。「久しぶりですね。張？將軍……」

「あなたは……？叡……やはり裏切ったんですね。」

「そんな事はどうでもいい。それよりもあなた程度の知略で我が術を敗れますかな？」

その言葉に張？は激怒し、

「あの愚か者を討ち落とさなさい。そして、早くその忌々しい輩を討ち取ってしまうのです。」

張？軍の兵はこの現象に恐怖を抱いた。目前にいたはずの軍勢は忽然と姿を消したかと思えば、今度は前後から出現したのである。

「これではいけません。やむを得ません。進軍して血路を開きなさい……」

張？のその声は何かが崩れるような音とパニックに陥った兵たちの声に掻き消された。完全にパニックに陥ったものの張？軍の兵達是我先にと幻影から逃げるために進軍を開始した。進軍しようとする兵達の動きは止まらずに次々と姿を消していった。張？がこの異変に気付いた時には既に半数以上の兵が大地の亀裂に飲み込まれていた。

？叡は初めからこの陣は囿のつもりで築いていたのだ。張？軍が陣の展開が完了した時には、既に百名ほどの兵しか残っておらず、しかもその百名は張？軍の中に紛れ込んでいたのだった。そして、張？軍が陣に攻め込んだ時に橋を落としたのだった。濃霧に映った人影が張？軍の平静さを奪い、背後からの喊声はそれに追い討ちをかけた。さらに濃霧は足場を不自由にし、張？軍を大地の割れ目に

次々と誘い込んだのだった。

十万いた軍も九万近くの兵が大地の割れ目に飲み込まれ、ほぼ壊滅状態に陥っていた。残った一万弱の兵を率いて、張？は先行して漢中に入っている夏侯淵軍と合流を果たすために先を急いだ。しかし、この先にも張？軍に更なる不幸が降り注いできた。進軍する張？軍は马超軍が仕掛けた罠にかかりその兵は徐々に減っていった。罠をかくぐり、拓けた場所に抜けたかと思うとそこには马超軍が配置していた伏兵が襲いかかってきた。马超軍の執拗な攻撃をかわしながら夏侯淵のもとに張？が辿り着いたときには十万近かった大群も既に数十名の兵しか残っていなかった。

夏侯淵は張？軍壊滅の報せを受けるのとはほぼ同時に張？の生存を確認した。張？に事の次第を尋ねてみた。張？はこれまでの経緯を事細かに説明した。それを聞いた夏侯淵は

「おいおい、马超軍と対峙したって、それなら俺が今、対峙している軍は誰が指揮している軍だって言うんだ。あの旗印はどう見ても马超の物だぞ。」

そう言つて、夏侯淵が指差した先には先ほどまでは姿を現さなかった马超が陣頭に構えていた。

それから後も硬直状態が続いていたが、ある日の朝、忽然と马超軍は姿を消していた。その後、夏侯淵軍は急いで進軍を開始したが既に马超、漢中軍の姿を見つけることはできなかった。夏侯淵軍は警戒を解くことなく山道に入った時、落石により進軍を阻止された。被害は無かったものの、その撤収作業は三日近くの日数を要した。

ようやく漢中の城の前に夏侯淵軍が迫ったとき城の異様な光景に夏侯淵と張？は唖然とした。城門は開け放たれ、人の気配がまったくくないのだ。また何かしらの策でも弄しているのではないかと疑い、夏侯淵自身が一人で入ってみた。

しばらくして夏侯淵は城から出てきて、

「どういうことだ。人っ子一人いやしねえ。」

この言葉に張？達は城内に次々と足を踏み入れた。

「確かに蛇の殻でございますね。」

「だよな……まあ、これで漢中の制圧は完了したんだから、問題は無いわな。」

そう言つて、夏侯淵は豪快な笑い声を上げた。

馬超たちは領民の完全に撤退完了の報告を受けてからも夏侯淵軍と対峙していた。かつての長坂の惨劇を覚えていたため、万が一を考えて牽制を続けていたのだ。そして、頃合を見計らい、一気に引き上げた。そして、先に引き上げさせた仙玉の待つ漢中と益州との国境にある城まで急いだ。その城は張魯の弟、張謹が管理している城であつた。馬超軍が城門の前に到着し城門を開くように要請した。その呼びかけに城壁の上に張謹が現れた。そして、馬超軍に矢の雨が降り注がれた。

「な、何をする！我らは敵ではない！」

「この国や城は最早、張魯の物ではない。全て曹操様の物。貴様ら如きが踏み入れるような場所ではないわ。早々に立ち去れい。」

と、張謹は叫び、弓兵部隊は第二射を構え、馬超軍に照準を定めた。それを聞いた？徳は

「仙玉はどうした。中には我が妹、仙玉がいるはずだ。」

「仙玉？ああ、あの女か。安心するがいい曹操様への献上品として

……」

その言葉は最後まで続けることはできなかった。風を切る音と共に何者かが張謹の紙縊りを射切つたのである。さらにもう一つ風を切る音がし、今度は張謹の肩口を射抜いていた。次の瞬間、烏騾が駆け出し、城内へと飛び込んでいった。あまりにも突然のことだつた為、馬超軍、張謹共に啞然としていた。

この城は堀が二重になっている城であつたが、騎乗能力に長けて

いる者であれば容易に入ることができたのだ。？叡は張謹の胸倉を掴み、壁に叩きつけた。

「言え！仙玉様をどうした！」

「そんな事をしてもう遅いわ。四時程前に他の献上品と一緒に送り出したわ。」

それを聞き、？叡は鳩尾に当身を入れ、黙らせた。

？叡は張謹を馬超の前に突き出し、状況を説明した。そして、

「馬超殿。私は仙玉様を助けに参ります。馬超殿達は一足先に援軍要請のあつた成都へ先に言ってください。私も必ず追いつきます。」

「？叡、ならば俺たちも……」

「多勢でいくよりも単騎で行った方が早く動けます。私ならばこの辺の地理は目を瞑ってでもわかります。地理に詳しい者が行くのが一番でしょう。それに……主君の危機を助けるのは部下の勤めですから。」

俺は？叡の事をよく知らなかった。仙玉はそれを理解し、？叡も仙玉をよく理解していた。正直な話、俺は？叡に嫉妬していたのだと思う。

「？叡、いや、志載。仙玉のことは任せたぞ。」

「わかりました。馬超殿もお気をつけください。最後にくれぐれも選択を誤らぬように……では、私は仙玉様を助けに。」

「ああ、志載。お前も気をつけて行ってこい。」

志載は軽く頷くと、烏騾で漢中の城の方角に向け、駆け出していった。その遠ざかる志載の後姿を見送り、

「我らは成都の地に向かう。全軍進め！」
と声を上げた。

先刻、張謹は四時程前に城を出たといっていた。荷を運びながらの進行ならば、毎時十四里ほどは進むことができる。この付近は舗

装が施されていないからやや進行は遅れるはずだ。ここから漢中の城まではおよそ百四十里ほどある。とはいえ、もし…そこまで考えたが？ 叡はその考えを振り切った。

「烏騮…すまぬが少しばかり無理をするがかまわないか？」

この問いに同意を示すように嘶いた。

「すまない…ならば、行くぞ！」

そう言つて鐙を踏みしめ、駆け出した。

油断をしていた。戦は終わり、後は凱旋するだけということでは先に引き上げるように言われ、国境の城で孟起様達の凱旋を待っていた。城主である張謹と雑談をしていたとき、私は背後から忍び寄る魔の手に気付かなかつた。突如、口を布で押さえられたかと思うと、気が遠くなり、そのまま意識を手放した。

意識が戻つたとき、私は後ろ手に縛られ、馬車に乗せられていた。周りを見ると贈呈品と思われるものがあつたためどうやら、曹操への献上品になるということがわかつた。外は既に日が暮れており、気を失つてから五時程はたっているようだった。この日はこれ以上の進行は無理と見てか、馬車はどこかの建造物の前で止められた。

？ 叡はこの一月でこの漢中がどのような土地であるかを事細かく理解していた。それ故に幾つかの中継地点になりそうな建造物を選択していた。

国境の城から漢中の城まで馬車ならば十時程はかかる。緩やかな道は少ない上、お世辞にも治安がいいとは言えないような場所、大体中間地点になる七十里の周辺で宿を取る可能性は高い。その周辺には宿は無く、そのような施設は寺院が四つしかなかったため、その四つに絞られた。

その四つの寺院をそれぞれ回り、輸送部隊の事を尋ねるがいずれも訪れていないと答えられた。念のために寺院の中を見せてもらつ

たが、嘘偽りは無く、誰も泊まっている形跡は無かった。最後に訪れた寺院の住職にこの近くに宿泊できるような施設は無いか訪ねると少し山中に入ったところに荒れ寺があることを聞いた。が、その山には山賊が出るといふのだ。輸送部隊がそのような場所に宿を取るとは思えなかったが、住職に礼を述べ、その荒れ寺へと向かった。

英傑集う成都

英傑集う成都

馬車から降ろされたところは少し荒れた寺であった。私は兵長と思われる男に腕を引かれ、本堂ではなく離れに押し込まれた。男はかつて宮殿で見たあの卑猥な目を髭髯させるような視線を投げつけ出て行った。それから一刻ほどして再びその男が戻ってきた。一步一步近づき、私の顎を人差し指で持ち上げた。その手を振り払おうとするが男の力は強かった上、後ろ手に縛られていたため、振り払うことはできなかった。

「やっぱりなかなかの上玉だな。こんな上玉、俺なんかじゃ滅多にお目にかかれないな。献上する前にこの俺が味見させてもらうとするか……」

その言葉に背筋に寒気が走った。

「や、やめなさい！献上品に手を出したとなればあなたの命はありませんよ。」

「けっ、そんなこと俺が知ったことか。それにどうせバレやしねえよ。どうせ生娘じゃねえんだろ。」

さらに近寄ってくる男から少しでも離れようとしたが後ろ手に縛られていたために逃げることもままならなかった。ついに壁際に追い詰められ、男は私を押し倒し、馬乗りになった。

あの呂布や董卓にすら、体を許すことだけはしなかった。それがこんな形で失うことになるとは思わなかった。

男の片手は仙玉の服に手をかけ、もう片方の手は仙玉が誰にも触れさせたことが無い場所へと徐々に近づいていった。

「いや！やめて！孟起様……志載……！」

抵抗を重ねる仙玉にパシンという乾いた音と一緒に頬に痛みが走った。

「少しは黙りやがれ！どうせ誰も来やしね…」
男はそれ以上言葉を続けることはできなかった。

一瞬にして体が軽くなった。男を見ると男は壁に激突し呻いていた。その原因を作った者の姿を確認しようとするが暗かったために目視することはできなかった。が、壁の隙間から漏れてくる月の光がその者の姿を浮かび上がらせた。

「遅くなつて申し訳ありません。仙玉様。」

仙玉は目に涙を浮かべ、仙玉の衣服は乱れ、白い肌がいくらか覗いていたが間一髪で最悪の事態だけは免れたようだった。

「さあ、行きましょう。仙玉様。」

そう言い、後ろ手に縛られた縄を解いた。

「待てや！キサマ、何様のつもりだ！」

そう言つて、？叡の肩を掴み、凄んだ。

「…のか？」

「ああ？聞こえねえだろうが！はつきり言えや！」

？叡は肩を掴んだ手を捻り上げ、男はあまりの痛さに声にならない叫びを上げていた。それにも構わず、

「死にたいのかと言っているんだ！」

と、言うが早い、その男を離れの外まで蹴り飛ばした。男は壁を突き破り派手な音を立て、転がった。その音に気付いた男たちが本堂からぞろぞろと出てきた。飛ばされた男は肩を抑えながら部下達に「殺れ、生かしてここから出すな！」

？叡は仙玉を横抱きにして、一気に躍り出た。そして、烏騷に仙玉を乗せ、最後に寄った寺院へと烏騷を走らせた。？叡自身は門の前に立ち、男達の行く手を遮った。男達は？叡を取り囲んだ。

「今宵の俺は機嫌が悪い。手加減はできん。覚悟しておくんだな…」
そう言つと、龍牙閃を抜き、男達を睨みつけた。その形相に男達は一歩後退りをした。

もし、男達がこの？叡の事を知っていれば、一目散に逃げただろう。が、不運なことに今日の？叡は鬼や羅刹程度の言葉で形容できるようなものではなかった。もし、男達がこの場から逃げようとしても逃げることは不可能であつたであろうが…結局、男達は生きながらにして阿鼻叫喚の地獄を体験することになった。

？叡は男達を片付けるとすぐさま仙玉の後を追いかけた。寺院に入ると住職が出迎えてくれた。

「仙玉様のご様子は？」

「先程休まりました。よほど疲れておいでだったのでしょう。どうしますか、様子をご覧になりますか？」

？叡は首を横に振り、

「いえ、休まれているのでしたら構いません。それに今は休むのが一番でしょうから…明日、起きられたら、すぐに発ちますので、それまでの間よろしく願います。」

「畏まりました。では、あなた様もお部屋のほうにご案内いたします。」

そう住職が部屋に案内しようとする、

「私はここで構いませんのでお構いなく。」

そう言つて、仙玉が休んでいる部屋の前を指差した。住職は困つたような顔をしつつもそれを咎める事も無く、本堂の中へと入つていった。

翌朝、日も高く昇りきつたところに仙玉は目を覚ました。仙玉は体を起こし、周りを見回した。横で馬の嘶きを聞き、そちらを見れば烏騮が心配そうな顔をして窓から顔を覗かせていた。仙玉が大丈夫と思いを込め、微笑みかけると烏騮は嬉しそうに嘶いた。

「お目覚めになったようですね。」

声の方を向くと扉のところに住職が立っていた。そして、その傍に

は？叡が愛剣を抱きかかえ、静かに寝息を立てていた。

「？叡殿も部屋に案内しましょうと言ったのですが、どうしてもここがいいと聞きませぬでな…」

その言葉を聞き、二人で苦笑した。それと同時に？叡は目を開いた。「お体の方はいかがでしょうか？」

「ええ、もう十分に休みましたから。」

そう言つて、仙玉は体を起こし、？叡もそれに合わせるように立ち上がった。それを見て、住職は

「では、もう日は高いですが、朝餉にいたしましょうか。」
と、言つて、部屋から出て行つた。

住職と共に朝餉を済まし、住職に礼を述べた。

「いろいろとお世話になりました。」

「お体にはお氣をつけくださいね。」

「ハハハ、気にしないでいいよ。それよりも道中氣をつけてな。」
別れを惜しみながら、二人は寺院を後にし、次の目的地、成都へと急いだ。

二人が去つた後、その寺に二人の客人が訪れた。

「おや、客人がいたのかい？」

「そのようですね。」

「なんだ、お前達か？二人そろつてどうしたんだい。」

白羽扇を持った青年が

「何だとはひどいですね。久しぶりに訪れた愛弟子に対して…」

「ふん、自分で愛弟子というか？どうでもいいがどうしてここに来たんだ。」

「いえ、殿が成都に来るようにとの事でしたので…」

それに続いてからだのあちこちに包帯を巻いた男が

「いや、先の戦で相手の姦計に嵌つてね、今度の戦で名誉挽回と思つてね。」

どうやら二人とも成都に向かっているようだった。

「そうか…ならば、さっきの二人とも会えるかもしれないよ。お前達の味方になるか、敵になるかはわからないがね。」

「そうですか…では、私達は先を急ぎますので…また次の機会に挨拶に伺います。師叔、お体にはお気をつけください。」

「ああ、早く行け。お前達の主が待つておるだろう。そうじゃ、龍虎を逃がすなよ。お前達が描く天下に必要不可欠な存在だろうからな。」

その言葉に白羽扇の男は頷き、包帯の男は

「ほんじゃ、行つてきますよ。師叔、今度は土産でも持つてきますよ。」

「わかつたから早く行け。この馬鹿弟子共が。」

そう言つて住職は笑いながら二人を送り出した。二人が見えなくなると住職は

「さて、龍と虎は臥龍と鳳雛にどう立ち向かうか楽しみじやな。それにあの娘、真っ直ぐな瞳をしておった。この先、この世がどうなるかまつたく楽しみじやな。」

そう呟き、煙のように消えていった。それと同時に先ほどの寺院があつた場所は無人の荒野へと姿を代えたのだつた。

成都では劉備軍と劉璋軍が激しい戦いを繰り広げていた。馬超は丘陵からこれを眺めながら、別れ際に？叡が言い残した言葉が気になる、どちらに着くべきか迷つていたのだつた。

その様子を見て私は従兄上に話しかけた。

「従兄上、この際、本来援軍要請のあつた劉璋軍の元で戦つてみてはいかがですか？」

「だが、それでは志載の言葉の意味がわからんぞ？」

「ですから、それは戦つてみればわかることではありませんか。劉備軍と戦い、その戦いの中でそれを見極めればよいのではありませんか？これは？叡からの伝言ですが…」

「いつお前にそんなことを言っただん？」

「別れる前にですよ。他にも見つけた答えが兄上の進むべき道だとも言っていましたね。」

たまには自分の力で考えてくださいね。とも言っていたのですがこれは黙っておいたほうがいいですね…と心の中で呟いた。

それを聞いた？徳殿は

「“虎穴に入らずんば、虎兇を得ず”という訳ですな。どうしますか、馬超殿？」

一同は沈黙し、従兄上の決断を待った従兄上は一つ溜息をつき、

「よし、俺の腹は決まった。これより、劉璋に与して劉備軍と相打つ。皆全力をもってこれを迎え撃て。行くぞ！」

西涼騎馬隊はついに進軍を開始した。？徳殿とどうして劉璋に与する事を選んだのか尋ねると

「劉備殿は御仁の方と聞いていたのだが、そうでもないようだ。それに何よりも劉備殿には単騎駆けの趙雲、万の力を持つ関羽、底無しの張飛と言った名立たる武将が多くいる。俺たちの武がそんな奴らにどれほど通用するものか興味がある。それに敵となれば、いずれは戦わねばならぬ相手だからな。ここで相手をするのもいいだろう。」

そう言うと、従兄上は先頭を切って駆け出していった。あまりに従兄上らしい答えに呆気を取られ、呆然とした。そして、二人で慌てて従兄上を追いかけることになったのだった。

成都は天然の要塞。守りに易く、攻めに難い土地。ここを制圧することができれば、孔明が言う“天下三分の計”を為す事ができるが、この戦に正義はあるのだろうか。天下を統一することができれば、より良い治世を施すことができるだろう。だからと言って、この地の民を傷つけるわけにはいかないのだ。そんな私の迷いは大きな過ちを招いてしまった。それは副参謀である？統を失ってしまっただ。その彼が最も望んでいた成都制圧という意味を達成させる

為にも、もはや退くことは許されないのだ。そして、ついに綿竹の森の前の？城までの制圧を完了した。それとほぼ同時に伝令が入った。

「伝令！本陣後方、成都城前に敵増援出現！旗印は西涼の馬超の物です。」

我らは軍を二つに分け、昂嬰と共に成都城前の敵を迎え撃った。我らと対峙したのは単騎駆けの趙雲殿と“鬼才”諸葛亮の妻月英殿であつた。私は趙雲殿に、昂嬰は月英殿に真っ向から勝負を挑んだ。馬岱にとつても私にとつても相手は格上の相手であろう。今、信じられるものは己が身一つ。退く事は許されないのだ。

俺は成都城を二人に任せ、僅かな手勢を率いて、劉備軍本陣裏手から奇襲を仕掛けた。そこで俺に対峙したのは底なしの張飛であつた。俺は張飛からの一騎打ちを受け、一度軍を止めた。

私は兄上や？徳殿と別れ、成都の南方に攻めて来る月英殿を迎え撃った。彼女は自らを武人であると称するだけあり、まさに万夫不当というに相応しい武将であつた。とはいえ、私とて昔のままではないのだ。

「西涼の馬昂嬰、いざ参る。」

その声を合図に私の槍と月英殿の湖底蒼月が火花を散らした。

馬超軍の予期せぬ襲撃に我が軍は浮き足立ったが義弟の益徳のおかげで最悪の事態だけは免れた。馬超は益徳から一騎打ちを受け、周りにいる者達はその光景に見惚れていた。益徳と打ち合う馬超の絢爛たる出で立ちほまさに錦馬超の名に相応しく、そして、その二人が戦う姿はまさに二虎相打つといったものだった。そんな時、諸葛亮の援軍が到着した。そこには戦死したと思っていた。？統もそこにいた。

「遅れて申し訳ありません。殿。」

「とんだ迷惑をかけてしまったみたいだね。でも、もう大丈夫だから安心して下さいな。」

「おお、孔明。それに？統、無事だったのか！」

「やはり出てきましたね。殿、後数刻で関羽殿もこちらに到着するそうです。」

しばらくして、雲長、黄忠、魏延の軍が到着し、孔明はそれぞれに援護に向かうように指示を出した。孔明は益徳の所には雲長が向かうように指示を出すか、

「軍師殿、私は構いませぬが、益徳のことです。一騎打ちの邪魔をしたとあれば、益徳のやつ、へそを曲げるのでは…」

「張飛殿には申し訳ありませんが、双方共にここで失うわけには行きませんから…」

その言葉に雲長は赤兎馬を駆り、益徳の元へ急いだ。その後、諸葛亮は黄忠と魏延の二人に月英と趙雲の援護に向かうように指示を出した。さらに関平、劉封、嚴顔の軍には成都城を攻めるように指示した。

諸葛亮は関羽の後ろ姿を見ながら、誰にも聞こえないように、
「さあ、舞台は整いましたよ。龍と虎はどう出るでしょうか…」
と呟いた。

騎馬での戦いであつた為、馬超にはまだ幾分の余力が残っていた。そんな時であつた。横から殺気を感じ、馬を引かせると目の前には赤兎馬に騎乗した関羽がそこにいた。流石にこの二人に二方向から攻められたとあれば、馬超とて抑えることはできないだろう。一度退こうと馬を返した時には関羽が背後を取っていた。

「兄者！こいつは俺の獲物だぞ。邪魔するなよ！」

「そう腐るな、益徳。軍師殿と長兄の命とあれば逆らえぬだろう。」
「けっ、仕方ねえや。」

そんなやり取りを交わす二人を見据えながら、馬超は付け入る隙を探していた。

「馬超殿、我ら二人を相手に勝ち目はござらんよ。おとなしく降るか、撤退してはいかがかな？」

関羽の言葉を聞いて、馬超は高笑いを上げた。

「おいおい…どうしちまつたんだ…も、もしかして、気が触れちまつたのか？」

張飛の言葉を聞き、馬超は二人に向かって、

「面白い。相手にとって不足は無い！天下に轟くこの西涼の錦馬超の馬術の真髄までお見せしよう。」

それに答えるかのように馬長の龍騎尖が風を切り、唸りを上げた。

馬超の馬術はあの呂布をも圧倒していた。二人で攻めても全く隙が無いのだ。とはいえ、馬超自身も二人の一撃一撃を完全に受け流しているわけではなかった上、先程までの張飛との一線からの疲れも手伝って、徐々に押され始めていた。仮に馬超軍の兵達が援護に駆けつけてきてもこの二人が相手ではきつすぎる。そんな事を考えていた馬超の背後から関羽の青龍偃月刀が振り下ろされたのだった。

竜虎、劉に降る

竜虎、劉に降る

馬超に振り下ろされた青龍偃月刀が馬超に届くことは無かった。

「遅かったな。志載。」

「無理はしないでください…馬超殿…」

そこには馬超よりも幾分若い少年が黒き馬に乗り、一本の鞭で関羽の青龍偃月刀を抑えていた。

「大体この一撃にしてもわざと受けませんでしたね。」

「お前が出てくるのが遅かったからな。それに俺は無理をした覚えは無い。あくまで無茶をしたんだ。」

もはや、関羽と張飛の存在を無視した二人のやり取りに張飛は我慢できずに

「急に出てきやがって、てめえ何者だ！」

「馬超軍参謀。？叡。わかりましたか？」

齒軋りをしながら今にも襲い掛かりそうな張飛を抑えつつ、関羽は「とりあえずはこれでほぼ互角と言ったところだな？では拙者も本気で参ろうか？」

そう言い、関羽は青龍偃月刀を構えなおした。

「志載。仙玉は無事なのか？」

「はい、今は？徳殿達の方に二人で向かっていますよ。」

「二人？」

「道中思わぬ援軍を得ましたので…それについては後ほどご説明いたしましょう。」

それを言い終わると龍爪尖を握り締め、関羽へと打ちかかっていった。

？徳は趙雲の援護に來た魏延に苦戦を強いられていた。趙雲だけでも苦戦を強いられていたのに魏延にまで來られたのでは流石に堪

らなかった。そんな時だった。

「お兄様。ご無事ですか？」

仙玉が援軍に来てくれたのだ。

「仙玉！無事だったのだな。良かった。ならば、ここを何とかして

早く馬超殿と昂嬰を……」

「心配いりません。孟起様には志載が、昂嬰にも援軍が行っています。」

「援軍？それは一体？」

「それよりもこの場を斬り抜けましょう。その事については後でお話いたします。」

そして、？徳は双戟を握り締め、仙玉は金麗玉錘を握り締めた。

馬岱は黄忠の弓攻撃と月英の湖底蒼月による攻撃に必死の攻防を繰り返していたが、最早、攻撃を返す余裕など残ってはいなかった。必死で攻撃をかわすのだけで精一杯であったのだ。月英の胴薙ぎをかわし、一歩下がったときだった。そこにあった草に足を取られて倒れた。そこに黄忠の剣“破邪旋風斬”が振り下ろされた。最早、これまでと目を瞑った瞬間、鉄と鉄がぶつかり合う音がし、目を開くと

「なっさけないわね、岱君。小さい頃から変わってないわ」

馬岱は目を白黒させ、目の前に立つ女性を見た。しかし、今一つ該当するような女性が思いつかない。その女性は黄忠の剣をはじくと舞うように立ち回り、二人を圧倒しだした。

「まだ思い出してくれないの？」

馬岱は起き上がると再び立ち回り始めたが、先程までとは違い、それに流されるように立ち回ることができた。

「面白い女子じゃのう。それに元気が良い可愛らしい女子じゃ。名前は何と言っくんじゃ。」

「お褒めの言葉ありがとう。おじいちゃん。私は西涼の馬超が妹、馬雲禄。馬岱と共に相手仕ります！」

「あ、従姉上〜！」

「本当に元気の良い女子じゃ。よし、この黄漢升が相手をしよう。どうじゃ、わしが勝ったら我が家に来ぬか？」

「ヤツダ〜おじいちゃん！」

そう言つて、馬雲禄（１８）は素手で黄中を叩き倒していた。

頭突き漫才が繰り広げられているその横で

「では、改めて勝負と行きましょうか？」

「そうですね。では、全力でやらせていただきます！」

月英と馬岱は再び一騎打ちを開始した。

結局、その日は火花散る勝負はその日の内に決着がつかず、翌日へと持ち越しということになり、お互いにそれぞれの陣に戻っていた。本陣に帰つて馬超と？徳は二人が行つていた援軍を見て啞然とした。兵の数は倍近くになっている上にそれを率いている将はあの馬雲禄だったのだ。

「ヤツホ〜！二人とも元気〜？兄貴は最後に見たときから一段といい男になったね〜徳兄は背が伸びた？仙玉は一段と綺麗になったし、何か可愛い子が増えてるじゃない。何か変わつてないのは岱君だけ？私はね、父様が死んだ後、とりあえず、力をつけようと思つて、各地を旅してたの。で、潼関で兄貴が軍を起こしたつて聞いて兵を引き連れて来たけど、既に撤退していてさ、漢中でもそうだったのよ。で、どうしようか途方にくれていたところで仙玉と志載を発見したの。で、ここまでついてきちゃったの。そしたら戦闘中じゃない。腕試しに丁度いいと思つて、おじいちゃん一騎打ちをしていたというわけなのよ〜で、今私が連れている兵達は各地で集めてきた（半分以上は上手いこと言つて強引に引き抜いてきた）屈強の兵達ばかりだから戦力としては十分だと思つわ。」

そこまで言い終わつて、雲禄はようやく一息ついた。そして、久方ぶりのスキンシップタイムに突入した。既にその被害にあっている？叡、馬岱、仙玉の三人はこれを回避するために陣幕から逃げている。

だが、馬超と？徳の二人はこれをもろに受けていた。その後、様子を見に来た三人は獣にでも襲われたかと思紛うほど無残な姿になった二人とその中央で満足そうな笑みを浮かべ茶をすする小悪魔を発見することになる。

結局この後、馬超殿たちは寝込むことになり、二人の事を仙玉様と雲禄殿に任せ、俺と昂嬰の二人で使者として訪れた法正殿と李恢殿の対応をすることになった。

「申し訳ありません。馬超殿と？徳殿が今し方、物の怪の襲撃を受けまして、話すこともままならない状態ですので代理として参謀のこの？叡と当軍の将である馬岱とでお受けしますがよろしいでしょうか？」

それを聞いた法正は

「大丈夫なのですか？あの御二方がやられるとは…」

「大丈夫です。一晩休めば明日には何とかなるでしょう。ところでご用件のほうを…」

「はい。我らはあなた方に力になってほしくてお願いに参ったのです。」

法正のその言葉に？叡は

「それは我らに劉備殿の軍門に降れということでしょうか？」

「簡単に言ってしまうえばそのとおりでございます。」

「お願いという割には威圧的ですね。では、こちらからも一つお伺いしますが敵対する勢力のあなた方が一緒に来たのは何故でしょうか？」

俺の問いに李恢は

「それは今の成都の君主、劉璋のやり方が許せず、仁の方と名高い劉備様を招き、新たな君主となっていただこうと諸将を代表してまいったのです。馬超殿は戦うべき敵を間違えてはおりませんか？」
？叡はその問いに

「馬超殿の戦うべき敵…ですか？」

李恢にそう尋ねると

「はい。馬超殿がここで劉備殿と戦って一番利するのが誰かあなたのような賢いお方が理解できないはずはないでしょう。」

その李恢の言葉に？叡は

「確かに我等の敵はあなた方ではありません。しかし、我等は漢中の張魯殿から依頼を受けた傭兵部隊のような物…我等を信じて蜀を託された張魯殿の思いをそう簡単に裏切るわけにもいきません。」

「しかし…それではあなた方の亡き君主馬騰殿の思いは…」

「今は亡き人の思いをさも知ったように語るような高慢な方に私は賛同する事はできません。それに私は馬超軍の参謀にすぎません。それに劉備軍へと降ると言う判断は私一人でする訳には参りません。馬超殿とも相談したいので今日のところはお引き取りください。」
その後、使者の二人は二刻ほど話をし、陣幕を出て行った。

話を終えた二人が、俺が休んでいる陣幕に入ってきた。

「志載。どんな話だった？」

志載は先程の話を伝えた。

「なるほど…志載と仙玉はどう思う？」

「そうですね。私は成都の民ではありませんから劉璋殿がどんな人物かといった詳しい事情はわかりませんが、素晴らしい君主だという話は聞いたことは無いですね。それに対し、劉備殿は民達からの信頼も厚く、惹き付ける物を持っているといえます。しかし、心を優先する傾向にあり、今までこの制蜀戦に踏み切れなかったことは君主としては画竜点睛に欠いているといえますね。」

「曹操の元にいた頃に一度話したことがありますが、確かに人を惹き付ける魅力のある方でしたわ。」

二人の見解を聞いて、

「一度劉備という人物に会ってみたいな…」

「劉備様というわけではありませんが、私たちでよろしければ、お

話をいたしますが…」

その声の方を向くと臥竜鳳雛と言われた二人が立っていた。皆の前に？ 叡と馬岱が立ち塞がり、

「何故、劉備軍の軍師、副軍師であるあなた方自身が共も連れずに我らの陣に来たのか伺いましょうか？」

それを見た諸葛亮は

「あなたが師叔の言っていた龍…一番奥にいる方が虎…そして、その傍らの方が龍と虎をつないだ月下美人ですか…」

「孔明、あんまりゆつくりはしてられないよ。」

「そうでしたね。私たちがここに来たのは先程の二人の話だけでは不十分かと思いましたが…」

「まあ、そんなことを言っているとあの二人からお小言を言われそうだから内緒にしておいてくれよ。」

？ 叡と馬岱は構えを解き、諸葛亮たちと向かい合うように腰掛け。諸葛亮は一息入れ、

「申し遅れましたが私は劉備軍軍師諸葛亮といます。そして…」

「同じく？ 統という者さ。で、用件つてのがね、あの二人が言ったことと重複しているんだけどね。あつしらはあんた達に降ってほしい。」

「確かにそれも一つの選択肢であることは重々に承知しております。」

？ 叡の言葉に皆は沈黙した。

「もちろんこのまま戦い続けることも可能です。これも一つの選択肢でしょうが、得策ではないことも理解しています。しかし、これは私達だけに言える事ではなく、あなた方にも言える事でしょう。我らの軍を殲滅しようとすれば、あなた方の軍への被害はかなり大きな物になる。そうなれば、あなた方も我々も共通の敵曹魏を討つ

ことは不可能となる事は紛れもない事実です。」

私は的を射た意見を述べる龍の少年を見据え、

「確かにそのとおりです。馬超殿は虎のような方。それにあなたが加わればまさに翼を得た様なもの。私たちがどんな策を練ってもただでは済みそうにありませんからね。それ故に、我が軍に降つていただきたいのです。それに馬超殿は私の天下三分の計において大きな比重を占めていましたから、いずれはこのように傘下に加わっていただくように交渉に伺う予定でしたので。」

「交渉と言う事はこちらにも有益な点があるという事ですな。それを教えておいて頂きたい。」

「曹操討伐の拠点・根城の提供。および涼州奪還でいかがでしょうか？」

「なるほど…どういたしますか。馬超殿？」

馬超殿は、

「ウム…そうだな…よし、降るかどうかは別とし、ここは軍を退くでしょう。そうすれば、そちらが蜀を制するということも容易になるだろう。」

「そうして下さいますか。では、殿にもそのように伝えておきますよう。」

そう言つて私は？統と共に自軍に戻った。

陣まであと少しのところで孔明は

「？統殿…あなたはどう思いますか？」

「あの三人のことかい？うん、そうだね。二人の武は昼間の戦闘を見る限りではかなりの物だね。先刻のやり取りだけじゃ計り切れないほどの奥深さを持っているみたいだしね。それに、まだ師叔が言っていたような才までは見せてくれてないみたいだしね。あの少年の奥深さはまさに底無しと言ったところかね。お前さんはどう思つたんだい？」

孔明はいつもの笑みを浮かべただけで何も答えなかった。

「相変わらず厭な性格をしているね」

？統殿の考えと私の考えは同じであつた。以前に漢中で起きた戦いでも馬超軍は三千の兵で十万の軍に快勝し、それでかつ民には一切の被害を与えずに撤退させることに成功しているのだ。私も長坂で同じような戦況に立たされた事があるが私は彼等のような真似はできなかった。それほど才を持った者がもし、魏や呉の手に渡つてしまえば？答えは明白である。そうなる前になんとしても手に入れないといけないのだ。

そのころ馬超軍の陣内は急な撤退の準備に兵達は急いで取り掛かつた。馬超は？叡に

「ああは言つたがこれからどうするつもりだ？」

「あそこの丘陵に軍を待機させ、既に劉備軍内に待機させている部隊に馬超殿、昂嬰、俺の三人で潜入します。」

その言葉に過剰なまでに反応を示したのは馬岱だつた。

「志載、それは無茶だろ！…もしかして本気？」

「本気のもりだが？それにここに来る前に一部隊に金子を渡して引き抜いておいたから、劉備軍に紛れるのは簡単だからな。それに兵士用の着衣は既に三着用意しているから問題ないだろ？」

「いや、潜入する理由と何で私かということを聞いているのですが

…」

「馬超殿の性格は俺よりもわかるだろ。で、能力的な均衡を考えるところなるんだ。それに仙玉様や雲禄が男装するのは難しい。それでこうなつたんだ。馬超殿からもお願いします。」

「つまりは俺自身が劉備という人物がどのような人物かを見極められるようにというわけだな。そういうことだ。昂嬰、令明をこちらの指揮から外す訳にはいかない。すまないが頼まれてはくれないか？」

馬超からこのように頼まれると断ることができないのが馬岱であつ

た。もちろんとそのことを理解したうえで頼ませているのだから？
叡の強かさはなかなかのものである。結局、馬超、馬岱、？叡の三人は夜が明けぬうちに劉備軍内に潜入した。

三人の身形は劉備軍の兵卒の物で馬超もいつものような華やかさは感じられなかった。手持ちの武器も腰の剣一つしかなかったため、周りにいる兵たちと大差は無かった。

劉璋軍の兵たちの多くは農民達が結成した自警団が主で成り立っており、武器は農具や竹槍が主であった。民兵など正規の軍にとって敵ではないが、劉備により民達には一切手を出すなどの命令が出されていたために今の劉備軍にとっては一番厄介な敵であった。

劉備は自ら陣頭に立ち、愛馬“的盧”に跨り、軍を進めていた。周辺には昨日、俺達と一騎打ちを繰り広げていた武將達は一人もいなかった。俺達三人は劉備のすぐ後方で臨戦態勢をとっていた。劉備が民に手をかけたならば劉備を、劉備が自身を傷つけられても民に手をかけなければ、その時は…

私は孔明や諸將の反対を押し切って陣頭に自らが立つことを決めた。千名ほどの手勢を率いて進軍し、孔明や諸將達は後から三里（約1・2km）ほど遅れて進軍するように命じた。私の覚悟を民に示すためには、自らの身を挺すしかないのだ。たとえ、孔明の知略をもつてしても、また、雲長や翼徳の武をもつて、成都を制圧することはできても、この国の心である民を制することはできないのだ。もし、ここで信念を貫くことが出来ないと言うならば、漢王朝の再建など夢のまた夢なのだ。だから、久方ぶりに陣頭に立つことを選んだのだ。

劉備軍が綿竹の森に入って一刻ほどした頃だった。竹林から伏兵が出現した。人数はかなりの数だったが、その兵達の身形は訓練を

受けた兵隊達とは程遠く、どこをどう見ても義民兵としか言いようがなかった。この程度の兵であれば、劉備でも簡単に切り捨てることが出来よう。もし、ここであの腰に佩いた剣を抜き、民兵に斬りつけることがあれば、そう二人に目配せをし、劉備の様子を伺った。劉備は兵を自分より後ろに退かせ、的盧から降り、一人前に出た。そのような劉備を見て、民兵達は後退りしながらも、

「ここから出ていくだ！」

「そうだ。そうだ！二度と来んでねえ！」

「おら達の国から出て行け！」

と、口々にいった。その声とほぼ同時であつた。

「止めるだ！崔融！」

そして、その民兵の一人が繰り出した竹槍が劉備の左腕を捕らえた。

劉備の左腕からは紅い鮮血が流れ出ていた。劉備軍の兵達はそれを見て民達に斬りかかるうとした。しかし、劉備は兵たちを制し、自らの剣に手をかけた。劉備のその行為に俺も剣に手をかけた。次の瞬間、劉備は思いもしない行動に出た。剣を腰から鞘ごと外し、その場に腰を下ろし、

「崔融殿と申されたか……」

先ほど竹槍で自らを突いた民兵に剣を渡したのだ。その行為は明らかに民を傷つけまいとする劉備の信念と覚悟を示していた。

劉備の剣をその民兵が受け取ったのと同時にその民兵の後ろから劉璋軍の将、劉循が飛び出し、民もろとも劉備を斬り捨てようと、

「劉備、覚悟！」

劉備は丸腰だったが民を跳ね除け、庇った。その民は横に倒れ、劉備は民の安全を確認すると僅かに微笑んだ。が、それ以上は動くことは出来ずに死を覚悟した。そして、劉備軍の兵達もつつさの事に対応する事は出来なかった。

最早、これまでと覚悟を決め劉備は目を閉じた。しかし、劉備にその凶刃は届くことが無かった。劉備が目を開くとその凶刃は劉備の首寸前のところで一人の兵がその剣を止め、一人はその首元に紙一重のところで剣を突きつけていた。先ほど突き飛ばした民兵も一人の兵が抱え起こしていた。しばらくして、民兵を抱え起こした兵が「まったく従兄上のような無茶を為される方だ。」

「確かに…」

と、それに同意を示し、

「お前ら…まあ、いい。この馬孟起。劉備殿の信念この目でしかと見せてもらった。我らはこれより劉備殿の将として、劉備殿の為に槍を振るおう！まだかかって来る者がいるというならば我ら三人が全力を持つてお相手しよう！」

その言葉は劉循の戦意を殺ぐには十分すぎるものであった。

「そ、そんな…馬超軍があちらに着いたとなれば、我らに勝ち目は無いではないか…」

と、ついに降伏を決めたのであった。成都城にいた劉璋もこの事を知り、城を明け渡し、降伏した。ここに長きに及んだ劉備の制蜀戦は幕を閉じた。

この後、馬超一行は劉備が治める蜀に迎えられ、馬超は蜀の五虎将として厚遇されたのだった。

かくや姫

馬超殿と共に劉備殿の元に傘下に加わり、一月が過ぎた。この一月は束の間ではあったが、大きな戦は無く、平穏な日々が続いていた。

その為、この一月は善政を施すために治安維持、衛生面、軍事力の強化に関して様々な面で諸葛亮殿や月英殿に協力をしてきた。皆の協力もあり、作業は円滑に進み、次の戦までの一ヶ月も同じようなことの繰り返しであろうと思っていたが、そうは問屋が卸してくれないようであった。しかもそれは思った以上に厄介な問題で、そして、それは急に俺の元に舞い込んできた。いや正確には持ち込まれてきたと言った方が正しかった。持ち込んだのは昴嬰と雲禄殿の二人であった。

「ちよつと志載！あの二人を何とかしなさいよ！」

「そうですね！誰が見ても夫婦みたいなのに何でくつつかないんですか！？じれったいって言ったらありはしませんよ！」

一気に捲くし立てる二人が落ち着くまで俺は一人状況の整理をしていた。とにかく、二人は馬超殿と仙玉様がいつまでもたっても結婚しないことに不満を抱いているようであった。

「いいですか？落ち着いてください。まず、何故そのような問題を俺のところに相談しに来たんですか？それに婚姻ともなれば、御二方の意思と仙玉様の身内である？徳殿の意思を尊重……」

「志載。ちよつといいか？仙玉のことで相談が……」

そう言つて、執務室に入ってきたのは？徳殿だった。

それを見て、俺がこの問題から逃げることは出来ないことを悟った……

馬超と仙玉は馬家と？家の間で幼い頃から許婚の約を交わしていた。馬騰が婚約解消を言い出したとき、馬超一人、いつか必ずこの

西涼の地に帰って来ると、猛然と抗議したために保留されていたのだ。仙玉自身、記憶を失っているにもかかわらず、いつの日か会えると信じて疑わなかった。そんな二人が十年の時を越え、奇跡的な再会を潼関の地に果たしたのだ。これほど思い合っている二人は周りから見ても恋人同然であった。年齢的にも問題は無く、？徳、馬岱、雲禄の三人はヤキモキしていたのだった。

？叡自身も何とかしたい問題であったのだが、仙玉至上主義者である？叡は仙玉の意思を尊重しようとの問題には触れなかったのだ。しかし、この二人が結婚しないことが仙玉をかぐや姫さながらの状態にする事になってしまっていたのだった。そして、その求婚者達は揃って？叡の執務室に押しかけて来ていた。

俺は頭にこの一ヶ月の情景を思い浮かべていた。それは今月に入って二週目の頃からであった。最初は劉備殿の養子である劉封殿であった。彼は劉備殿に気に入られ、養子となり、その後は劉備軍を将でも関平殿達に並ぶ実力の持ち主であることを聞いていた。

訪れてきた彼に失礼の無いように椅子から立ち、彼に近づくと、彼は俺の手をとり、彼が放った第一声は、

「？叡殿！ぜひ、この劉封に仙玉殿を私の妻として迎えることを許可して頂きたい！」

突然のことに状況を理解することは出来なかった。かろうじて聞き取ることが出来た“つま”と言う言葉を必死で漢字変換しようと試みた。

「今、何と仰いましたか…？」

「ですから、仙玉殿を我が妻として…」

我に帰り、劉封殿を見据え、

「お断りいたします。」

「何故ですか！？仙玉様はやはり馬超將軍に？」

「それはわかりませんが、私はあくまで仙玉様の家臣。この私が許

可を下すわけには行きません。それに婚姻については仙玉様自身がお決めになるべきことですので…」

「では、せめてお話だけでも…」

「そのような事であっても私が許可を出すわけにはいきませんので、そのような事は？徳殿か馬超殿に伝えられるか、この私に勝てる物を持つているか、仙玉様に直にお伝えください。」

「もちろん、馬超殿や？徳殿にこの様な事を言える者もおらず、俺自身、武においても、軍略においても五虎将である將軍達や諸葛亮殿や？統殿であっても勝てずとも引き分けに持つていくことが出来る自身もあつた。さらには恥ずかしさのあまりに仙玉様自身に言える者もないだろうと踏んでこう言ったのだった。」

それは逆に、俺のところに仙玉様の縁談を持ちかけようとする者を増加させるに過ぎなかった。劉封のこの騒動を皮切りにこの後も、文官の法正、関羽殿の実子、関興殿、しまいには老将、嚴顔殿まで蜀のありとあらゆる武将や文官が俺の元に押しかけてきたのだった。

来る日も来る日も執務室を訪れてくる文官達を見事に言いくるめ、また勝負を挑んでくる武将達を悉くあしらい、追い返し続けていたのだった。ある意味、蜀の土地は平和ではあつたのだが俺の周りでは常に仁義なき戦いが繰り広げられていたのだった。流石に疲れを感じ出していた頃に三人がこの問題を持ち込んだのだった。

三人が帰った後、執務も終わり、仕事という仕事は全くなかったために？叡は仙玉の元を訪れた。最近では会う時間も無く、会うのは実に一週間ぶりといったところであつた。？叡は執務や仙玉への求婚者の応対に追われ、仙玉も多種多様の仕事に追われ、時間と言う時間は無かつたのである。

「お久しぶりでございますね。仙玉様。」

「志載ですか？どうかしましたか？」

「いえ、最近、どう為されているかと様子を見に來ただけにございます。ところで一つお伺いしたいことがあるのですが…」

「何でしょうか？」

「実は最近の話なのですが、私の執務室に蜀の武将や文官方が毎日のように訪れて來られたのですが、こちらにも來られましたか？」その質問に仙玉は不思議そうな表情をし、

「いいえ、それがどうかなさったのですか？」

「はい、実はその執務室に訪れた方々の用件と言つのがまことに言いにくいのですが…そのほとんどが仙玉様についての話だったので。それで…」

ますますわからないと言つような表情をする仙玉に

「私の話ですか？ いったいどんな話だったのですか？」

どうやら仙玉は最近、蜀で行われている仙玉争奪戦の事を知らないようであつた。

「それが仙玉様の縁談の話だったのです。私も失敗したと思つているのですが…実は…」

そして、？叡は最近、身の回りで起こつた事を話し出した。

二週間前、？叡の執務室に飛び込んできたのは関羽配下の武将周倉であつた。

「？叡殿、某と勝負していただきたい！」

「…勝負内容は？」

「小細工抜きの一対一の勝負でどうでしょうか？」

「まあ、いいでしょう…では、鍛錬場に行きましょうか…」

結局、周倉は一瞬のうちにやられたのだが、その日、問題だったのはそれから後だった。この後、これを皮切りとして、？叡は王平等武将達だけではなく、一般兵卒も加えて百人ほどを相手にする羽目になったのだった。しかもその全てが仙玉への求婚権を賭けてというのだから恐ろしいものであつた。

一週間前、？叡の執務室に飛び込んできたのは寥化、簡雍、伊籍、
敵顔達であった。

「……？叡殿、私と勝負をしていただきたい！」「……」

「何を言うか私が先だ！」

「そちらこそ何を言う！私が先だ。」

「私が先に決まっておるだろう！」

「童共は下がっておれ！」

「で、何をするんですか……？」

「……困碁！」「……」

？叡は大きなため息をつき、

「わかりました。では、四人同時にどうぞ……」

四人と同時に三回ずつ指すが、結果は全て同じ手数で持碁。

「さあ、これで気が済んだでしょう。お引取り願います。」

結局、この日も？叡に勝負を挑み、勝てた者は一人もいなかった。
ちなみにその翌日には馬良、馬謖、法正達が訓練を兼ねての模擬戦
闘を挑んできたのだがこれもまた全ての軍を一刻もしないうちに悉
く打ち破った。

三日前、？叡の執務室を訪れたのは馬雲録に引き抜かれてきた甘
寧、牛金、そしてなぜか蜀に来ていた魯肅の三人であった。甘寧、
牛金は一騎打ちを挑み、魯肅は外交における討論を持ちかけた。牛
金は無手で戦う？叡の動きについていけず、敢え無く敗退。甘寧と
は半刻戦ったが勝負は付かずに引き分け。魯肅は物の数秒で言い負
かされ、呉に帰るはめになった。

「と、言う事がここ最近に起こったことなのです。まあ、全て話せ
ば、まだ長くなりますが……で、今日訪れたのはこれを仙玉様はどう
なされたいのかお聞きしたかったのです。」
志載の言葉は質問というよりも確認であった。

「私は…孟起様さえ良いと言つて下されば…」

「なるほど…ですが、たまには仙玉様から言うのも良いかもしれま
せんよ。仙玉様は馬超殿のことが好きなのでしょう？仙玉様がどの
ような選択をなさつても私は常に仙玉様の味方です…」
そう言つて笑みを浮かべ私の私室から出て行つた。

仙玉様を尋ねた後、俺は馬超殿を訪ねた。手ぶらで行くのも何か
と思い、地酒と酒の肴になりそうなものを見繕い訪ねた。そこでは
既に蜀の槍使いの三人が集まり、杯を交わしていた。

「俺も混ざらせて貰いますね。」

「？叡殿も来たんですね。」

「久方ぶりに馬超殿と飲もうかと思つて来たのですが…あなた方も
ご一緒だつたんですね。」

「志載、まあ、早くこつちに来て飲もう。」

馬超達が用意した酒と？叡が持つてきた酒もそろそろ尽きるかと
いうところで？叡は本題を切り出した。

「馬超殿…よろしいですか？」

真面目な顔をして馬超の方に体を向けた？叡に

「何だ？」

「仙玉様のことですが…」

「そつえばどうなんですか？この間、仙玉様へ求婚するための権
利をかけて、？叡に勝負を挑んだんですけど負けちゃつたんですよ
ね。大体早いところ、馬超殿か？叡で身を固めてほしいですよ。
つてあれ？？叡も仙玉様のことが好きなんですよね？」

酔いの回つた姜維は？叡に後ろから抱き着いて来る。それを制し、

「俺のことはどうでもいいですが、馬超殿はどうなんですか？」

馬超は一つため息をつくと静かに話し出した。

「志載の言うことはもつともだ。確かに俺は仙玉のことを愛してい
る。もちろん一人の女としてだ。だが、自信が無いんだ。俺が仙玉

といた時間は幼い頃の八年、それに比べて、志載は俺より短い付き合いで仙玉を理解している。そして、仙玉もお前のことをよく理解している。俺は仙玉や志載に支えられてやっと立っていられるようなものだ。そんな俺が仙玉をこれから先も、支えていく自信が無いだから……」

「……だから、この俺に仙玉様を譲ると？甘えたことを言わないでください！それでは、仙玉様の気持ちはどうなるのですか！悪いとは思いますが、今のあなたに着いていく事は出来ません！頭を冷やして、これからどうすべきかと言うことをじっくりと考えてください！今日はこれで失礼いたします！行きますよ！趙雲殿、伯約！」
二人の襟首を掴み、？叡は部屋を出ようとした。

「馬超殿……一言言っておきますが、私と仙玉様の関係はあくまで主従のみ……それ以上でもそれ以下でもありません。私たちの間に恋慕の感情は……ありませんよ……これだけは忘れないでください。」
そう言つて、二人を引きずつて？叡は部屋を出て行った。そして、部屋には馬超が一人取り残された。

？叡は二人と別れ、一人屋敷へと戻つていった。その時、ひどい眩暈が？叡を襲い、足がふらつき、？叡は壁に寄り掛かった。
「まだだ……まだ……」

その声を聞いたのは夜の闇と空に浮かぶ一つの月だけであつた。

屋敷で一人残された馬超は一つの決意をした。

「家臣、いや、好敵手にあそこまで言われて動かねばこの俺の名が
廃るか……」

そして、立ち上がり、ある場所へと向かった。

志載に言われて気付いた事だつた。確かに私はこれまで自分から行動に移そうとはしていなかった。いつも受身で自分を出すことがなかった。志載と出会い、少しずつ変わってきていたとは思ってい

たがそれでも私はまだ受身な人間であつたことを思い知らされた。志載が私に言った言葉が心に響いた。私は立ち上がり孟起様のもとへいくことを決意した。

翌日、俺の執務室に三人が飛び込んできた。

「何とかしてくれたんですね!？」

「本当にありがとうね!これで心置きなく次の戦に参加できるわ。」

「確かに本当にすまないな。志載…」

そう言う三人に

「いえ、礼を言われるようなことは何もしていませんよ。私はまだ少し執務が残っていますので…」

そう言って、俺は三人に背を向け、執務を再会した。

惜別の刻

惜別の刻

すぐそこに控えた漢中奪還の戦の準備のために蜀国内は騒然としていた。既に先陣である黄忠が天蕩山を手中に収め、夏侯淵を牽制していた。

黄忠の陣は夏侯淵の陣を一望できる所に取っており、魏軍の兵一人一人の動く様子が手に取るようにわかった。もちろん、夏侯淵は将である前に一人の人間である。この様に毎日のように動きを見られていては精神的にどうにかなくなってしまいそうだったが、天蕩山は陰しく、下から攻め上るのは困難を極めていたのだった。

魏軍は本体が来るまでの牽制、蜀軍は本体と合流し、一気に決着を着けようとお互いがそれぞれの援軍の到着を待っていたのである。

出立前夜の事だった。志載は私の元に来て、

「昂嬰：少しいいか？」

あまりにも思いつめた表情を見せる志載に私は驚いた。それもそのはずだった。志載はいつも冷静沈着で物事に動じるところなど今までに見せたことが無かったからだ。

「どうかしたんですか？」

「今後の事で頼みたいことがある……」

？ 叡を見て馬岱は少し驚いたような表情を見せた。それもそのはずである。いつもは冷静沈着に振舞い、表に自分を出す事が無かったような者が今、自分をさらけ出しているのだ。そして、その口から告げられた事は想像を絶する物であった。

「俺は明日の戦いが終わったらこの世から消えるんだ。」

一瞬、自分の耳を疑った。志載は今、何て言った？ 消える？

「…いやだな。冗談は止めましょうよ。戦に出る前から死ぬなんて…縁起が悪いですよ。大体、志載程の人が戦場で死ぬ訳ないじゃないですか…」

「…確かに死ぬ訳じゃない。死ぬ訳じゃないが、この世から消えるんだよ。…本来、俺はこの世にいるべき人間ではないんだ。この時代にいてはいけないんだよ。」

「それはどういうことですか…？」

私は志載がこの様な事を冗談で言うような者ではないことを知っていた。志載は、

「俺も頼む以上全てを明かす。だが、これからする話は他言無用だ。いいな？たとえ、それが馬超殿であっても、仙玉様であってもだ…」
私はそれを承諾するしかなかった。

「…わかりました。」

「俺は魏の将、？艾の息子なんだ。兄の名は？忠。去年生まれた。」
「魏の将ですって！でも、兄が去年生まれた？ど、どういうことですか？それでは辻褄が合わないのでは…」

「実際、俺が生まれるのは今年の定軍山での戦闘が終わってから生まれるんだ。」

俺が十五の頃だった。父上は魏の軍師司馬懿殿の弟子だった。ちょうど蜀の軍師殿と伯約との間柄のような物だったんだ。魏の中でも父上は鍾会という、武将と双肩をなす武将だったんだ。

自分の父をこういうのは何だが父上は吃音癖があつて様々な君主に使えたがその吃音癖のせいでどこでも冷遇視されてきた。そんな中で司馬懿殿だけはそんな父の才を認め、自身の後継者の一人として重く用いてくれた。子である俺や兄、そして、母にも親切にしてくださった。

司馬懿殿は曹魏の中でも優秀な方だった。だが、それ故に曹一族からの妬みはひどいものだった。危険視されながらも魏の為に生き、

魏の為に最後は亡くなった。司馬懿殿が亡くなった後、家督を継いだのは司馬懿殿の長男であった司馬師殿だった。彼も司馬懿殿に負けず素晴らしい物を持っていた。そして、次男である司馬昭殿も…だが、彼らにとって、私の父上は邪魔な存在に過ぎなかった。

司馬師殿は司馬懿殿が亡くなってから、しばらくして起きた乱を制圧する途中で亡くなった。が、その後に家督を継いだ司馬昭は父上を事あるごとに殺害しようとしたんだ。そして、今から二十年後、蜀を討った父上と鍾会殿は仲違いを起こし、その確執に目を付けた司馬昭はそれを利用して…

父上や兄上はこの時に鍾会ともども処刑されてしまった。俺はこのとき何とか難を逃れたが、俺も例外ではなく御尋ね者として、追いつめられた。父上から任された母上や妹を昼夜関係なく襲って来るヤツ等から避けるために魏国内から出国しようとした。成人もしない俺が一人で家族を守りながら逃げ切れるわけもなく、結局、母上や妹はそいつ等の手にかかり…俺はその後逃亡を続けたが一度賞金稼ぎ達に追いつめられたことがあるんだ。その時で出会ったのが今、俺が乗っている烏騾だ。烏騾があの時来てくれなかったら、俺はここにいなかったらうな…

今のこの時代にどうやって流れ着いたかは知らないが、烏騾と出会った後も当てもなく彷徨っているうちに董卓の元にいた仙玉様に出会い、救ってもらった。その頃の俺は信じていた主君“司馬昭”の謀略によって嵌められ、俺以外の家族全てを失っていた。最初、仙玉様に一緒に来ないかと誘われたとき、正直迷った。他人が言うことなんて信じられなかった…人間の言う事…いや、この世の全てを信じることなんて出来なかった。その時、仙玉様は一人で郊外まで出てきていたんだ。

その頃、仙玉様はあの董卓の愛妾と言うことで狙われることも多

かつたらしいんだ。運悪くその時に野党からの襲撃を受けてな、俺は全身に傷を負っていたからほぼ戦力にはならなかった。

仙玉様はもちろん自身の身を守るために戦っていたのだろうが、それでも俺には被害が来ぬように戦ってくれた。今の仙玉様の戦い方を見ればわかると思うが、仙玉様は多数を相手に戦うのはかなり不利だ。一人でさっさと逃げれば余計な怪我もせずすんだんだ。それにも拘らず、今さっき初めて会った俺のために血を流してくれた。野盗を撃退した後、ただ微笑みを向け、大丈夫かと…その上、俺を屋敷に連れ帰って自身よりも先に手当てをしてくれた。自分の方がひどい怪我をしていたというのにだ。

仙玉様は俺を一人の人間として接してくれた。人のぬくもりに触れることが出来たのはそれこそ久しぶりだったよ。本当に嬉しかった。まだこれから生きていこう、生きて仙玉様の為に俺の力を活かしていこうとその時決意したんだ。

俺が消えなくてはいけない事を知ったのはこちらに来て、仙玉様の親衛隊長となった頃だった。お前も“三皇”の伝説は知っているだろう。その一人の伏羲が時間の軸を捻じ曲げている俺の下に来て、何故、俺がここにいいのかと言ったんだ。もちろん何でここにいいのかなんて俺は知るわけもない。そう伝えれば、ならばお主はこの世から消えねばならない。同じ時間軸に同じ人間が存在するわけには行かんからなと言うんだ。俺自身そんな事をされたくはなかった。

たとえ、相手が神であったとしても俺は仙玉様の為にこの命を賭けて戦おうと決めていたんだ。その矢先にそんな事を言われたんだ。正直な話、焦ったよ。それもそうだろう。やっと自分の場所を掴めたかと思えば俺がこの世に存在してはいけないって言われたんだ。

そんなのは冗談じゃない。仙玉様の恩に報いる事すら出来ていな

いのにそんなこと出来るわけない。伏羲…いや、三皇を倒してでもここにいたいと思った。

その時、ふと伏羲が笑みをこぼし、こう言った。天寿を全うするまでとはいかんが、お主自身が生まれる年までの間、我らはそなたを見守る事にしよう。それにしても面白いヤツだ。神に喧嘩を売るようなヤツは初めて見た。お主がこの世から消滅する、つまり、お主自身がこの世に生を受ける定軍山の戦い間での間まで精一杯生きよ。

伏羲が言っていた事だが、伏羲や他の二人も心を読むことが出来るらしいんだ。当然、俺の心は読まれていたらしくて、俺が実際に口に出す前にそう言ったんだ。

その後も彼は俺の夢に現れ、その中で那太子に武を鍛えてもらい、清源妙道真君に軍略を教わっていた。この二人の師のおかげでこれだけの力を得たんだ…

志載の話を聞き終え、

「だから、志載の並外れた武や知略、志載が仙玉をあれだけ信頼していたのはそういう理由だったのですね。」

「ああ、そして、仙玉様と行動を共にするうちに馬超殿の事を知った。馬超殿にも少なからず通じる物があつた。だからこそ、共に来たんだ。そして、本来やつてはいけない事なんだが、これを…」

「これは？」

志載は私に一つの中着を渡し、

「一度だけしか使えない…とは言っても一粒しかないが、これはたいていの病を抑えることが出来る丸薬だ。」

そう言つて中身の説明をしてくれた。

「どうしてこんな物を？」

「馬超殿は定軍山の戦いの後、半年ほどでこの世を去る。しかし、

馬超殿は蜀にとって…いや、仙玉様にとってまだ必要な方だ。まだ死なせる訳には行かない。

この丸薬は俺の父が暗殺される前に開発した物でもう資料も精製法も何も残されていない最後の丸薬だ。発病後、これを飲むと七日間、高熱に襲われるがそれを越せば、その病は治るはずだ。

間違っても健康な人に寝ませるなよ。健康な人にとっては劇薬になる薬だからな。それから後、馬超殿の身に何かがあればそれから先、仙玉様の事を守ってほしい。」

「今度の戦が終わったらもう会えないのですか？」
私の問いに志載は

「さあな…それよりも仙玉様の事は任せた。そうそう、仙玉様達にどうしたかと訊かれたら戦死したとでも言っておくのが最善だろう。ついでに俺の髪を遺髪として昂嬰に渡しておく。首を渡すわけにはいかんからな。」

そう言葉を濁し、私の陣幕から出て行った。

そして、ついに開戦の時を向かえた。定軍山の最終決戦は人質である陳式と夏侯尚の交換から始まった。二人がすれ違った瞬間が開始の合図となり、両軍は互いに矢を射かけた。黄忠の放った矢は見事に夏侯尚の背に命中したが、それでも魏軍本陣に向かって駆けて行くこうとしていた。志載は傍にいた兵卒の槍を受け取り、夏侯尚に目掛けて放った。その槍は放物線を描き、夏侯尚の身体を貫いた。陳式は何とか無事に蜀の陣営に辿り着き、蜀軍の士気は最高潮となった。

私は志載と共に先陣の黄將軍の第二陣として従軍していた。私はこれから起こる戦闘よりもこの戦闘が終わった後、もう志載と会うことが出来ないことのほうが気になって仕様が無かった。戦場に迷いを持ち込めば、死は免れないだろう。だが、生死を共にした仲間

から突然の別れを告げられれば正常でいるのは難しい。私はいつもと変わった様子を見せずに兵達に指示を出す志載の後姿を見つめた。

黄忠殿から敵軍を討つのは今夜という連絡を受け、俺は出陣の準備を整えていた。そんなとき、俺の陣幕に昂嬰がやってきた。

「志載…さっきの話なんだけど…それを聞く代わりに俺からも頼まれてくれませんか？」

言い辛そうに尋ねて来る昂嬰に少し笑いかけ、

「頼みって何だ？聞ける事なら聞くけど？」

「志載との約束を守るには二つ条件があります。」

「条件？」

昂嬰の表情はいつものおっとりとした物ではなく、真剣に深いところで訴えてきた。

「志載を止めるのはもう無理だとわかってる。でも、志載がいなくなつて兄上も近くに死んでしまう事になれば仙玉の悲しみは計り知れないだろう。」

昂嬰のその言葉に俺は黙り込むしかなかった。そんな俺を見て、昂嬰は

「だから、いつか必ず俺達のもとに戻ってきてくれ。それが条件だ。」

「難しい条件だな…」

「それさえ誓ってくれるんなら」

「何時になるかはわからない…だが、いつか…必ず昂嬰達のもとに帰つてこよう。約束する…それで…もう一つは？」

「もう一つは今回の戦闘は私と最後の時まで一緒にいてください。最後まで見送っておきたいですから…」

「わかった…」

それを聞いた昂嬰はにっこりと笑い、

「志載ならそう言うと思いました。」

そう言つて、昂嬰は俺に背を向けた。

「約束ですよ。それでは私は戦の支度をしてきますね。」

俺は昂嬰と先行し、黄將軍の道を切り開いていった。雨音は俺達の軍が放つ殺気、攻め寄せる蹄の音を掻き消し、闇夜が黒衣に身を包んだ俺達の姿を隠していた。いつの間にか雨は上がり、雲間からは月が顔を覗かせていた。その時には既に俺達の軍は夏侯淵が指揮する陣の前まで攻め寄せていた。

突如、眼前に月明りが晒し出された軍勢に夏侯淵軍は慌てふためいた。夏侯淵は自身の駆使する棍棒で応戦していた。

追い詰められたとはいえ、相手は歴戦の猛将夏侯淵である。向かってくる敵兵をなぎ倒し、敵兵を次々に討ち取っていった。歴戦の猛将といえど、所詮は人の子である。ついにその猛将の人生に幕を引く人物が到着した。夏侯淵はその姿を確認すると棍棒を構えなおし、その猛将に立ち向かっていった。勝負は一瞬であった。夏侯淵が振り下ろした棍棒ははじかれ、その将が駆使する剣は夏侯淵を唐竹割にした。その時をもって、この定軍山の戦いは幕を閉じた。

勝ち戦の夜に蜀陣内は歓喜に溢れ帰っていた。そんな中、私と志載は、天湯山の陣内の一番高い場所にいた。

「時が来たみたいだな……」

「どうしても行くんですね……」

「ああ……」

志載は私に微笑みかけ、

「心配するな。約束は守る。いつか必ず昂嬰達のもとに帰ってくる。たとえ生まれ変わったとしてもそこが俺の還るべき場所だからな。」
私は目に溢れる物を押さえ、

「必ず帰って来てください。みんなで待っていますから。」

志載は頷き、天を仰いだ。そして、志載の体は夜の闇に溶け、薄れていった。

戦場を舞う龍、再び

戦場を舞う龍、再び

蜀は大黒柱である諸葛亮を失い、最早、衰退の一途を辿っていた。蜀を討つ為に魏の司馬昭はついに軍を発した。鍾会、？艾の指揮する魏の軍勢は次々と蜀の軍勢を打ち破っていった。諸葛尚、傅僉といった将も各地で奮戦をするも敗北は必至であった。そして、姜維が立てこもる剣閣も限界が近づいてきていた。

そして、姜維達とは別の場所で奮戦する一軍があった。それは馬家の一族が率いる軍であった。

「義姉上！雲禄従姉さん！？徳殿！芙蓉様！ご無事ですか！？」

「ええ、私達は大丈夫です。」

「我らは大事ない。」

「昂嬰叔父さんこそ大丈夫？」

従兄上は十年前に亡くなった。私を叔父さんと呼ぶ従兄上の一人娘である芙蓉も今年で二十を迎える。せめて彼女だけとはと、皆で説得を試みたが、芙蓉は頑固として、説得に応じなかった。

「芙蓉にかかると流石の昂嬰も形無しね。」

「そうですね。」

義姉二人の苦笑にため息を一つ…

「それを言わないでください…」

誰よりも自分が分かっているのですからと胸の内に収めていた。

「ほら、また敵がやってきたよ。みんな気を引き締めて行こう。」

芙蓉の言葉に四人は武器を構えなおした。

応戦も空しく残っているのは四人と数名の配下兵だけとなっていた。それでも、次から次へと魏の軍勢は押し寄せてきていた。
「くっ！志載がいてくれたらこの状況でも引っくり返してくれそう

なものなのだな……」

「？徳殿、それを言っても何も始まらないでしょう。」

「そうかもしれないが……」

「ねえ、志載って誰？」

「私を守ってくれていた武将の方ですよ。いつも私やあなたの父上達の危機には必ず颯爽と駆けつけて来てくれていたのですよ。でも、今はもう……」

「これ以上話をしている暇はないようですよ。」

そう言つて馬岱は豪真空槍・改を？徳は驚天動地を手に握り締め、立ち上がった。

配下の兵達は残りあとわずか数えるほどしか残っていなかった。最後に一矢報いてやろうと四人が前に出たとき、目前からは五万騎程の軍勢が土埃をあげながら徐々に近づいて来ていた。多勢に無勢のこの状態では幾ら彼らが万夫不当の豪傑といえども歯が立たなかった。四人でどれだけの魏兵を斬っただろうか……終焉の見えない戦いに四人の体力は限界に近づいていた。そして、ついに五人は取り囲まれ、進むことも逃げることも出来なくなってしまった。

進退窮まりつつも何とか五人は綿竹まで辿り着いた。

「どうしますか……私はどうもこの辺が限界のようですね……」

「それは俺も同じだ……仙玉、芙蓉……お前達はどうか？」

肩で息をしながら？徳が答えた。

「兄上……私もここまで見たいですね……」

「悔しいけど私も……」

どう考えても五人とも最早、限界が近かった。

「しかし、ここにいつまでもいては心中することになりかねません。ここは？徳殿にお任せします。機を見て、戦線を離脱してください。」

「昂嬰。お前、もしかして……」

「死ぬつもりはありませんよ。それに…」

「それに？」

「いえ、生きて必ずまた逢いましょう。では！」

そう言つて、昂嬰は敵軍の中に斬り込んでいった。

馬岱と別れた後、仙玉達は魏の別働隊に行く手を阻まれ、進退窮まった。？徳は覚悟を決め、馬雲禄に目で合図した。

「…仙玉。ここからは二人で進むんだ。」

「令明はどうする気なの？」

「某は雲禄と二人で奴等を食い止める。芙蓉を頼むぞ。」

「ですが、兄上…」

「令明が残るなら、私も残る！これ以上大切な人達を失いたくないよ。」

「何を甘えてんの！ここでみんな死んでしまつたら、元も子もないでしょ！」

「いやだ！私も残る！」

「…芙蓉、よく聞きなさい。某達は死に行くのではない。一つの志を次に繋ぐために戦っているのだ。この志継ぐ者無くば、某達の戦いが無意味な物になってしまうのだ。そうならないためにも芙蓉、そなたは仙玉と共に生きるのだ。」

「そうよ。私達だつて死ぬと決まつたわけじゃない。必ず芙蓉のもとに還るから…それにどれだけ離れていても芙蓉が忘れない限り芙蓉の心の傍に私達の心はある。だから、忘れないで…あなたは蜀の五虎将錦馬超の遺児、馬芙蓉であること。あなたが孟起に仕えていた四天王の最後の一人の還るべき場所になつてあげて。」

「さあ、芙蓉、行きますよ…」

「絶対…絶対に生きて歸つて来てね。」

「ああ、わかつているよ。」

目に涙を浮かべながら、立ち去る二人を見送り、二人は肩を下ろした。

「さて…とは言ったもののこれからどうする？令明。」

「やるしか無かるう。某達にはそれしか残ってないのだからな。」

「そうね。」

「某は？令明。この双戟に誓ってこの先には一兵足りとて進めさせん。命惜しくば去れ！さもなくば、撃滅させて戴く！」

「我が名は西涼の錦馬超が妹、馬雲禄！我が槍の前に立ちはだかる者は全て貫く！覚悟！」

天を揺さぶり、大地を震えさせるほどの二人の覇気に魏の兵達や馬達は怯え、進軍することはできなくなってしまうた。

？徳達が食い止めている間に二人は少しでも戦場から離れようとするが、ここでもまた魏の兵達が二人に襲いかかってきた。褒美に目のくらんだ兵達の攻撃は凄まじく、ついに二人は追い詰められることとなってしまうた。

仙玉と芙蓉は敵兵の一撃によりそれぞれの武器は弾き飛ばされてしまった。仙玉と芙蓉はこれまでと覚悟を決め、目を瞑った。その時である。二人の背後から一陣の風が吹き、その風と共に飛んできた槍が敵兵達を貫いた。芙蓉や魏兵達の目線の先には漆黒の馬に乗った一人の武将が立っていた。魏兵達が身構えようとした時、その武将は腰に佩いた剣を抜き、魏の兵団に切り込んだ。瞬く間にその武将はその剣で大地を朱に染めた。その青年は生き残った魏兵達を睨みつけた。

「警告する…死にたくなければ去れ…去れば命だけは助けてやる。」
魏兵達からすれば、納得できるわけがなかった。さらに後方からは味方の軍勢が押し寄せていた。せつかくの手柄首を逃す理由はなかった。

「貴様一人で何ができる！あの状況の見えぬ愚か者共々討ち取つてしまえ！」

その武将はため息を一つつき、手を挙げた。

「斉射せよ！」

挙げた手が振り下ろされると同時に無数の矢が魏軍に降り注いだ。
更にその武將は

「敵が混乱している今こそ好機！斬り込むぞ！俺に続け！」

背後から喚声が上がると同時に黒装束の將兵が魏軍に突撃していった。

突然の蜀の増援：勝ち戦に酔っていた魏の將兵達にはこの突然の反撃に成す術はなく、魏の兵達は蜘蛛の子を散らすように撤退していった。魏の兵達が去ったのを確認すると、その武將は一步一步、二人に近づいて行った。

芙蓉は剣を拾いそれを向け、威嚇した。仙玉はハッとして芙蓉を制した。その青年に歩み寄り、真正面からその青年と向かい合った。青年は仙玉の前に跪いた。

「あなたに助けられるのはこれで何度目でしょうか…志載…」

仙玉の言葉に？叡は頭を横に振り、

「二十年前の約束を果たしに参りました。仙玉様。この？志載。今一度、この命、仙玉様にお預けいたします…」

そう言つと、？叡は

「さあ、お前たちの出番だ！」

その言葉に現れたのは百騎程の兵達であつた。

「？志載の名において命じる。雪桜隊は陽平関の傳僉殿を、風魔隊

は綿竹の諸葛譚殿、諸葛尚殿を、虎徹隊は剣閣にて戦う姜維殿を、

封鬼隊は白帝城で戦う蜀軍を！さあ、それぞれ各地で戦う蜀軍の援護をせよ。時間がない！散れ！」

「ハッ！」

それに応じた兵達は四方八方に散つていった。

「では、俺は昂嬰や？徳殿達の救援に向かいます。その間は東南の方角にある山城で待機しててください。そこは魏軍の手が及んでいません。朱樂隊、お前達は仙玉様達の護衛を任せる。頼んだぞ。」

「御意…」

「無明、お前は俺と共に昂嬰達の救出に向かう。行くぞ。」

「承知！」

「では、仙玉様。行つて参ります。ハッ！」

純白金縁の鎧に身を纏い、漆黒の毛並みの烏騅を駆り、瞬く間に？
叡は駆けて行つた。それを見て、

「母上、私は彼を追います。先にその城に行つて下さい。」

「芙蓉！」

仙玉が止めようとしたときは既に馬を駆り、駆け出して行つてしまつた。仙玉も後を追おうとするが、それを止めたのは朱樂であつた。
「仙玉様…芙蓉様のことは？叡様にお任せください。？叡様であれば必ず守り通してくれるでしょう。」

「ですが…」

「？叡様を信じてください。仙玉様との約定を？叡様が違えることが無いのは仙玉様、あなた様が一番よくご存知のはずです。」

それに仙玉は項垂れ、

「そうですね。では、皆に急ぎましょう。」

そして、仙玉達は皆に急いだ。

どれだけ？徳と馬雲禄が強かろうと所詮は人である。二人は魏兵の猛攻になすすべが無かつた。幾人ものの兵の槍が馬雲禄にめがけて放たれた。？徳は庇おうとするが前に魏兵達が立ちはだかり、行く手を塞いだ。馬雲禄にはもはや槍をかわせるほど動くことはできなかった。

「これまでね…」

そう呟いた瞬間、敵がその場に崩れ落ちた。

「雲禄とは思えない言い草だな…」

二人が見上げるとそこにはかつての姿のままの武将がたっていた。

「「志載！」！」

「退路は確保しているが、懐かしいと思っている暇はない。さあ、早く！無明の後に続いてくれ。俺は昂嬰を助けに行く。」

「すまない……」

私の周りには魏の兵達の死体が転がり大地をその青と赤で染め上げていた。しかし、それでも容赦なく延々と襲いかかってくる魏の兵達は尽きるところを知らず、果て無き死闘に身体は悲鳴を上げ、最早限界であつた。

「志載。私はもう、あなたとの約束を守れそうにないですね……」

そして、幾人もの武将達が私に向かって斬りかかってきた。覚悟を決めた次の瞬間、その武将達は残らず背後から飛んできた槍で串刺しとなつた。吹き飛ばされていた。

「この程度で音を上げるのか？ 昂嬰？」

その若い武将は彼ではなかつたが、雰囲気は彼のものに間違いはなかつた。

「還つて来てくれたのですね……」

「他の皆も無事だ。後は昂嬰だけだ。早く昂嬰も馬に。敵を蹴散らすぞ。」

私は馬に跳び乗り、一気に駆けた。ある程度駆けた所で志載は向きを変えた。

「志載？」

「俺はここで敵を食い止める。昂嬰、お前は早く仙玉様たちと合流しろ。」

「しかし……」

「もう俺が消えることはない。安心しろ。」

「分かりました。でも、急いでくださいね。」

「わかっている。」

昂嬰が立ち去つた後、向かってくる砂埃を前に

「これ以上、先に生きた者は一人として通さん！ 通ろうとする者は全て斬り捨てる！」

そう叫ぶと斬り込んでいった。

馬超、字を孟起。

西涼の馬騰の嫡男として生まれる。豪華絢爛な出立ちで戦場を駆ける姿から西涼の錦馬超と恐れられる。父をはじめとする一族を失い、曹操を仇とする。貂蝉や？叡に出会い、戦う理由を見つけ、劉備が理想とする仁の国のために戦場を奔走する。その姿はあの曹操もが恐れ、虎の如くであつたと語られる。

貂蝉。

彼女は漢の使徒王允の養女として董卓と呂布の関係を引き裂くために仕えた。呂布の死後は？叡の知略に助けられ、曹操の食客となる。その後、記憶を取り戻し、自身が西涼の？徳の妹である事を知る。潼関で再会を果たすとそれからは馬超達と行動を共にする。蜀の劉備達のもとに行つてからも馬超を支えていく。馬超と？叡をつなぎ逢わせたその儚い美しさを具えた彼女はまさに砂漠にほんの僅かの間しか咲かない月下美人を思わせた。

その者は魏の将、？艾の次男として生まれる。司馬昭の謀略により家族を失う。その後、放浪する中でいつの間にか時代を遡り、董卓の愛妾であつた貂蝉と出会う。貂蝉と出会い、自身の新しい戦う理由に気付く。真実を知りながらも消えるときまで主君のために命をかけて乱世を生き抜く。そして、再び貂蝉の元に舞い戻り、誓いを果たし、貂蝉や馬超の悲願であつた太平の世を築き上げるため、劉禅達を支えていく。貂蝉に貂蝉と馬超との間に生まれた馬芙蓉を託され夫婦となる。そして、多くの英傑達が夢見た天下統一を実現させる事となる。その知略と武はまさに飛龍の如くであつたと語られる。

姓は？、名を叡。字を志載。

魏に生まれながらも護ると決めた者のためにその生涯を懸け戦い抜いた。それは記録に遺されてはいなくともその護りたいと願い、戦い抜いた姿はその時代に生きた一つの真実であつた。

龍と虎と月下美人ゝ完ゝ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7183i/>

竜と虎と月下美人

2010年10月9日21時31分発行